{水}

作・広田淳一

登場人物

ヒソップ …
シトロネラ（シトラ） …
楠木（くすのき） …
菖蒲（あやめ） …
セージ（チタンカーメンズ） …
ネロリ（チタンカーメンズ） …
ベルガモット …
ローズヒップ …
イランイラン …
ヒバリ（バニラ） …
パルマローザ …
サンダルウッド …

◎表記について

・ ――間を取らない読点。
★ ――前の台詞の語尾に重ねて言う。いわゆる食い気味。
／ ――間髪入れずに台詞の調子・方向性を切り替える。
＝ ――語尾に「＝」が付き、続く行の語頭に「＝」が付く場合、間髪入れずに次の台詞が始まる。行をまたいで語頭に「＝」が付く場合、それらは一人の人物の連続した発話である。
［ ――近くにある同数のこの記号と同時のタイミングで始まり、重なったまま発話される。
▲ ――そでにはけながら言う。
▽ ――言いながら登場する。
☆ ――同じ数字の☆印を、同時に言う。

ト書きの「間」と「一拍」は、「一拍」の方が短い。
（このような）括弧内の文字は発話されない。
このような傍点付きの台詞は強調の意味。強調して発話するとは限らない。

1　視線　ここから動かない

口上

口上　ハッピーエンド

開演前。客入れ音楽がかかっている。舞台上にうっすらと光。
パルマローザ、登場。この時点では音響、照明、客入れ時より無変化。
◆音響　パルマローザが所定の位置につくのに合わせてだんだん消えて無音になる。

パルマロ　「水」。

◆音響　曲in　M0　音量大きめに入る。

音楽とともに登場する俳優たち。
口々に何かを話している。それは独り言でもあり、他人に向けた会話でもある。
ふいに喋っている人数が一気に減って、最後、一人の声だけが観客に届く。
残るのはゆっくり喋る女の声。

パルマロ　――それでね、女の子のとこに男の子が行くことになって、二人はいよいよ出会うことになったわけなのよ。男の子は最初、どろっだらけのゴム長靴を履いてたんだけど、女の子と出会ったらその長靴がもう、手が切れちゃうぐらいエッジの効いたラクダ色のブーツになっちゃって、そしたら、女の子のほうも睫毛がくるくるっと上を向いて目がうるうるして天ぷらを食べた後のぴっかぴかの唇になっちゃって、そんで二人は最高のカップルになったのよ。

一拍。

パルマロ　ん？　なったの。なったのよ。でね、二人は鳥かごを持ってるんだけど、籠の中にはヒバリとホトトギスが入っていて、二羽はケンカなんか絶対にしないで、いっつもじゃれあってて、どっちとも二人のことが大好きで、二人も二羽のことが大好きで、だから、たまの休みにはみんなでピクニックかなんかに行っておいしいおいしいお弁当を末永く食べ続けたのでした！　とさ！　ハッピーエンド！

俳優、わいわいと相談を始める。

サンダル　うーん今のはハッピーエンドかな？
イラン　はっきりしない。
パルマロ　そう？　結構、ハッピーな感じだったと思うけど。
セージ　いや、違うよ。

ベルガモ　全然違うでしょ。
パルマロ　そうかな。
ローズ　あれ？　そもそもハッピーエンドってなんだったっけ？
セージ　え？　ハッピーエンドてのはだから――
ヒソップ　「いい感じで終わる」ってことじゃないの普通に。
ローズ　いい感じね。
シトラ　いやー、なんかもっと絶頂感あるでしょ。
ローズ　絶頂感ね。
イラン　そうかな。あたしはもっと落ち着いたもんだと思うけど、
ローズ　なるほど。落ち着きね。
セージ　いちいち納得してんじゃねえよ
サンダル　何がハッピーエンドかなんて人それぞれでしょ。
ローズ　人それぞれね。
サンダル　ハッピーエンドそれは？
ヒソップ　幸福な結末。
サンダル　ハッピーエンドそれは？
イラン　たのしいうれしい終り方。
サンダル　ハッピーエンドそれは？
ベルガモ　決まったこと過ぎたこと終わったこと。
サンダル　ハッピーエンドそれは？
パルマロ　わかんない。
セージ　わかんない？
バルマロ　（前を向いて）あたしは「この私」のハッピーエンドについてさえあんまりわかりませんん。だから、この世界みんなのハッピーエンドについてなんて、もっともっとわかりません。けれど少しは。私のことなら。
ベルガモ　けれど少しは。私のことなら。
ヒソップ　じゃ、言おう。
パルマロ　あたしにとってのハッピーエンド、それは、
セージ　近づいてくる幸福の足音。
パルマロ　ハッピーエンドそれは、
シトラ　ワクワクしてドキドキして何かを待っている時のこと。
パルマロ　ハッピーエンドは、ハッピーエンドの直前！
ヒバリ　突然ですが、このお話のハッピーエンドの直前はこんな感じ。

俳優たち、移動。

ヒソップ　じゃ、言おう。君の病気はもう治らない。治らない、ていうか君は死ぬ。明日死ぬ。
シトラ　明日死ぬ？

ヒソップ　そう、明日死ぬんだ。君はその病気がもう治らなくって、明日には君の身体はミズウミになる。そうなんだおかしいだろう？　明日には君の身体はミズウミになるんだ。そのミズウミの中で君は溺れるようにして死んでしまうんだ。僕だってまだ見てない。見てないから知らないよ。知らないんだけど、近頃、僕はそういう仕事をしているからわかるんだ。君は泳げないから、バタバタ暴れて苦しんで、辛い辛い辛い苦しい中で死んでしまうんだ。せっかくあんなに我慢してきたのに最後には水をゴボゴボいっぱい飲んで、肺にまでめいっぱい水を溜め込んで辛くなって重くなって水になって、死んじまう。

多人数の喋りにヒソップの喋りが溶けていく。
だんだん人が少なくなっていって、やがて舞台上にヒソップだけが残る。

ヒソップ　シトラ！
サンダル　ヒバリは小さい身体に不釣合いな声でこう言ったんです。
ヒバリ　白猫君は僕を食べたいとは思わないか？　どうせなら君みたいにまっ白でふくよかで、上等な猫に僕を食べて欲しいんだ。
パルマロ　全く興味を示さない白猫。黄色い毛糸で遊び続けます。
サンダル　けれどヒバリはお構いなしで、彼の目の前にゆっくりと身を、横、た、え、ます、と白猫、ふさふさの毛玉の前足で、（ばしっ）
仁・恵　猫・パンチ！
ベルガモ　ズさあっ

間。

サンダル　吹き飛ばされたヒバリは身動きもせずに次の一撃を待っている、そこへもう一度、
仁・恵　猫・パンチ！
サンダル　さらにもう一度。
仁・恵　猫・パンチ！　猫・パンチ！
ベルガモ　ズさあっ　ズさあっ
サンダル　血を流しながらもヒバリは観念して動かない。トドメの一撃！　が加えられるその直前、白猫は興味をなくします。
パルマロ　白猫は動くものが何より好きでしたが、同じ動かないものなら茶色いものよりも黄色いもののほうが好きだったからです。
サンダル　ヒバリが薄目を開けて、見ると、
パルマロ　再び毛糸と戯れている白猫。
サンダル　もう一度目を閉じる、まだ生きていてもう動かないヒバリ。

と、女が叫ぶ。

ローズ　ミズウミの近くに建つアパートの６階、ベランダに一人の男が立っています。
パルマロ　後ろ手にベランダの柵を掴んで前傾姿勢。ラージヒル、ジャンプのポーズ。

何人かで実際にそのポーズ。

サンダル　ヒバリはやがて薄目を開けて、
ヒバリ　見ちゃいらんないよ、ヒソップ、見ちゃいらんない。
サンダル　血だらけの身を起こし、その場を離れんがため羽ばたきをせんとするまさにその瞬間、
ローズパルマロ　ひゅーん
パルマロ　ジャンプした男が落下して水面を突き破る、その音、
セージベルガモ　ざっぶーん、
サンダル　が、聞えるその直前、男の動きはスローモーションになって音が消える。
ローズセージ　シャッターチャンス！
イラパル　パチリ！

◆音響：曲in　シャッターチャンスのテーマ。

パルマロ　彼の時間は宙吊りにされました。
サンダル　あとほんの一瞬でこの男の頭は水面を突き破る、そして次の瞬間に彼の身体は水になる。
あやめ　どこにいるのー？
サンダル　まずは質問に答えなくちゃいけません、
あやめ　この写真の人はどこにいるの？
楠木　砂漠だよ。
あやめ　どうして？
楠木　逃げてきたの。
あやめ　誰から。
楠木　ひとまず。
イラン　ニッポン、
セージ　トウキョウ、
ローズ　お風呂、
ベルガモ　水。
イラン　ぴちょーん。
ベルガモ　水になる。
ローズ　ヒソップ
ベルガモ　水の泡だ
イラン　ニッポン、
セージ　トウキョウ、
ローズ　お風呂、

ベルガモ　水。
イラン　ぴちょーん。
ベルガモ　水になる。
ローズ　シトロネラ。
ベルガモ　水の泡だ。
イラパル　水になって泡になって、水になって泡になって、ニッポン、
セージ　トウキョウ、
ローズ　お風呂、
ベルガモ　水。
パルマロ　めでたしめでたし。
ヒバリ　はじまりはじまり。
パルマロ　メデタシメデタシ。
ヒバリ　ハジマリハジマリ。

俳優達、退場。

2 平行線　ずっと交わらない

仲人

仲人　半地下　1

俳優たち　ピンポーン。
ローズ　はーい。どなた？

ローズヒップ、あやめ、登場。

あやめ　イランイランさんはご在宅でしょうか？
ローズ　お友達？　それともお仕事の？
あやめ　あ、仕事じゃないんですけど、あの、あたしシトロネラさんの友達で
ローズ　あぁ、シトラの？　じゃ、まあ、どうぞどうぞ。（奥へ向って）お客さんだよォ。

あやめが部屋に通され、イランイラン登場。上の階から降りてくる。

イラン　どなたー？
あやめ　こんにちは。私、あやめと言いまして、あの、シトラさんのお母様で――？
ローズ　そうだよ。なに？
あやめ　あぁ――、いや、あんまりお若いんで。
ローズ　でしょ？　この人、長いこと「誕生日」きてないからさ。
あやめ　あぁ――。
ローズ　何年か前にシトラの方が年上になっちゃったんじゃないかな。ね？
イラン　まあ、あんまり若いっていうのも意外と面白くもなんともないもんだけどね、仕方ないのよね、来ないものは来ないんだし、来ちゃう時は来ちゃうんだから。
あやめ　そうなんですか。
イラン　でもこの人なんて、去年だけで十一回も来たのよ誕生日、
ローズ　いっぱい苦労してんだよアンタと違って。
イラン　で何？　シトラがどうかして？
あやめ　あの、すごく言いにくいことなんですけど――
イラン　まさか。
あやめ　――はい。

間。

イラン　あらそう。最悪。あらそう。――だってあの子、あと何年かは大丈夫なんて言ってたのに、あと何年かは、なんていってたのにね――。そうだったの。まあ、でも医者の言うことなんていつだってあてにならないもんですからね――。あぁ、そう。あぁ、そう。

ローズ　それでわざわざ来てくれたのね、どうぞゆっくりしていって。暑かったでしょう？

あやめ　ちょっと蒸しますね。

ローズ　そうなの。酷いでしょここ？　半分地下室みたいんなってるからさ、なんせ風が抜けなくて。屋上に行けばは少しは居心地がいいんだけど――、ホラ、見てあれ。（天井を見るように促す）

俳優たち　ぴちょーん、ぴちょーん。

あやめ　水滴が、

ローズ　雨漏りじゃないんだよ。夏は湿気で水たまりが出来ちゃうの。

あやめ　大変ですね。

イラン　何かお飲みになる？　ソーダと紅茶どっちがよろしくって？

あやめ　え、じゃあ、えーと、ソーダで。

イラン　ソーダで。

ローズ　いま無いよ。

イラン　無いの！　ソーダは無いの！

あやめ　――はあ。

ローズ　★ああ、でも残ってたかな――。

ローズ、ソーダを探しにいったん、部屋の奥に引っ込む。

間。

イラン　あなたさっきシトラがもう、あの、――いないってことを言おうとしたのよね？　それって何を根拠に言ってるわけ？

あやめ　根拠、ですか？

イラン　だってシトラはヒソップっていう、ホラ、旦那さんと一緒に幸せに暮らしていたんでしょう？

あやめ　はい、確かに一緒だったんですけど、ちょっと言いにくいんですけどあの、ヒソップさんもあの――アパートが傾いてしまってベランダから零れ落ちたんです。

イラン　零れ落ちた？

あやめ　はい。これあの、ちょっと待ってください、あの、ヒソップさんがベランダから落ちちゃった時の写真で、

あやめ、イランイランに写真を渡そうとする、

ローズが代わりに受けとる。

イラン　やめてやめてそんなの、
あやめ　ほら決定的な、
イラン　どういう神経してんのよちょっと？
あやめ　いや、二人が住んでたアパートの写真とかそういうのもありますんで、
イラン　やめてったら！
ローズ　なになに？
あやめ　ああ、いや、
ローズ　はい、ソーダ水。プラムしかなかったからそれでいい？
あやめ　あ、すみません。
イラン　ありがとう。
ローズ　うん。

イラン　あーもー、最悪。わざわざそんなもの見せに来たわけ？
あやめ　はい。あ、あと、この卵を。
ローズ　なに？　卵？
あやめ　はい、ヒバリの卵なんですけど、あの、なんかお母さまがシトラにヒバリをプレゼントされたっていう風に聞いたもんですから、これはだから、そのヒバリが——
イラン　バニラが産んだ卵？
あやめ　はい、バニラちゃん、が多分。だから、あの、どうぞ。

あやめ、イランイランに卵を渡す。

ローズ　あれ、バニラちゃんはどうしたのじゃあ？
あやめ　わかりません。でも楠木さんがこの卵はお母様にお渡しするように、って。
ローズ　ふーん、そうなんだ？
イラン　だいたい、え、楠木て誰さんよ、何？
あやめ　あ、すみません、楠木っていうのは私のまあ知り合いでして、あ、ヒソップさんのお友達でもあるんですけど、すごく仲良しで、でそう、この写真を撮ったのも楠木さんなんですけど、
イラン　なんで今日いらっしゃらないのその、楠木さんは？
あやめ　それはちょっとあの、
イラン　なに？
あやめ　いや、楠木さんはちょっと、逮捕されているから——
ローズ　逮捕？　逮捕って、え、あの逮捕？
あやめ　はい。あの逮捕です。
イラン　どういうこと、ちょっと？　ヒソップさんはそういう逮捕されちゃうような人とお付き合いがあったっていうこと？　そういう一味？　ていうかなに、あなたもそういう一味の一味なの？
あやめ　違います、一味とかではなくて——
ローズ　★落ち着きなよ、いいから。

イラン　★ていうか、あんたホントにシトラのお友達なの？　シトラはそんな一味の人とお付き合いするような子じゃありませんよ。
あやめ　だから一味じゃありませんって。
イラン　あああ、やっぱりこの写真、お返しします。あたし拒否します。こんな結末は断固拒否します。
あやめ　え、いや、でも――。
イラン　だいたいね、あたし写真なんてものは、どうせならきれいな絵でいいじゃない、って思ってるんですよ。どうせ続いてくことなんていつだってつまんないって決まってるんだからさ、終わらせるんならきれいな絵でいいじゃない、って。
あやめ　でも、　これはイランイランさんに持っていて欲しいんです。
イラン　いらないって言ってるでしょ！
あやめ　でも、シトラとヒソップさんの住んでた家は、あの、こんな感じのとこでした、っていう。楠木さんにも、ちゃんと渡してくるようにって言われてますし。

一拍。

イラン　あなたが持っていてもしょうがないものだろうしね。

間。

イラン　見るわ。あとでゆっくり。
あやめ　ありがとうございます。あの、じゃあ、ちゃんとお話しますから。ちゃんと。あの、聞いていただけませんか？
イラン　何を話すの？
あやめ　シトラと、ヒソップさんのこと。

仲人　お笑い

舞台上、別の場所に楠木が出てくる。

楠木　（観客に）シトラとヒソップのことについて話す前に、僕とあやめさんのことについて少しお話しておきたいと思います。僕は楠木（くすのき）といってヒソップとルームをシェアしてるんですけど、あ、いきなり出てきてすみません。で、これもいきなりなんですけど、結婚式には仲人っていうのが居て、それもまたカップル・二人連れの人間になってるじゃないですか？　言ってみれば、シトラとヒソップの仲人が僕とあやめさんだった、ていうわけなんです。
あやめ　（観客に）私は違います。

楠木　（あやめに）違わないでしょ。（観客席に）僕とあやめさんはお客さんの頭越しに出会ったんです。自分、お笑いのライブに行ってたんですけど「チタンカーメンズ」っていうコンビに、ちょっとその頃ハマってまして。その日のライブものすごい大っきい野球場でやってたんですけど、なんかもう、ほとんど見えないんですよ。なんかこだわりらしくて、モニターとか置かないんで、もう、ツッコんでる手とか、全然見えないんですよ。ま、それは最初っからわかってたからいいんですけど、その日はなんかネタがいまいちだったんで、ちょっと途中で「帰ろうかなぁ」って感じになっちゃったんですね。自分、スタジアムの通路をこうやって、後ろの出入り口に向って歩いてて、彼女もちょっと離れた通路をトコトコ歩いてて、で、この座っているお客さんの頭ごしで、こうやって目が合ったんですよ。

あやめ　（観客に）私は違います。

楠木　（あやめに）合ったじゃないですか。（観客に）合ったんです、僕は。確かに。でも、あやめさんは何度聞いても

あやめ　（楠木に）私は違います。

楠木　って言うんですけど、間違いなく合ったんですよ。あやめさんと、目が。だから僕は同じタイミングでライブを抜け出したあやめさんに話しかけてみたんです。彼女は自販機で買った紙パックのジュースを飲んでました。パッソア豆乳オレ。

あやめ、「パッソア豆乳オレ」を飲んでいる。

あやめ　まずうま。

楠木　まずうま？

あやめ　ありえないホント。

楠木　結構、お好きなんですか、チタンカーメンズ？

あやめ　まあ。お好きっていうか、まあ――。

楠木　ははは。ハイハイ。

あやめ　――なんか面白い事いいました？

楠木　いいえ。――あ、同じギャグでしたね。

あやめ　や、違うネタで同じギャグとかもう――。

楠木　ありえないですか。でも最近ちょくちょくありますよね。あの、チタンは結構前から――？

あやめ　――だいたいチタンの活動はフォローしてるかな。若手の中では一番まともっていうか、まあ、才能あると思うし普通に。あたしからすると近ごろもう、初期のキレていうか、そういうのが全然なくなっちゃってるんだけど。

楠木　あー、かもしんないですね。僕もチタンのライブ初期からずっと見てるんで。

あやめ　そうなんだ。――え、初期って？

楠木　だから初期ですよ本当に。あのー、チタンの初舞台を僕、たまたま見る機会があって。ていうか友達があの、ネロリ君の知り合いだったんで――

あやめ　（驚いて）ネロリの？

楠木　違いますよ、僕は知り合いじゃないんですけど、友達の友達で。それで、なんか一緒に行こうよっていうんで、たまたま観にいったライブが面白くて。もうだから、それからはずっとですね。
あやめ　え・え・え、じゃあさじゃあさ、会場限定のフィルムとかも持ってたり、とか？
楠木　ほぼ全部持ってますよ。
あやめ　てことは、え・え・え、てことはさ、「王家の思う壺」とかもあるってこと？
楠木　あれはいいですよね。初期の総決算ていうか僕の中では未だに最高なんですよね。
あやめ　マジに持ってるの？　だって・だって・だってあれ、観客四人しかいなかったって伝説の？
楠木　もうちょっとは居ましたけどね。さすがに四人てことは。
あやめ　でも、え、ホンキ／その場に居たっていうことですよね？　――すごいんですけどホント。
楠木　ああ、じゃあ、良かったら貸してあげましょうか、フィルム？
あやめ　はい。はい。はい。じゃあの／え？　ウソ／いいんですか？　いついついつ貸してもらえますかね？　あ、じゃあ連絡先とか／あ、ご都合はいつがよろしいでしょうかね？
楠木　別にいつでも。あ、じゃあ今度飲みにでも行きましょうか？　そん時までに焼いときますんで。
あやめ　お酒を飲みに行けばいいんですね。え、それはあの、え？　一緒に飲むんですか？　それとも別々に？
楠木　――いや、一緒に行かないと貸せないんで。
あやめ　てことは、てことは、――二人っきりって意味ですよね？
楠木　あぁ、――別に二人っきりじゃなくてもいいですよ。別に飲みじゃなくてもいいですし、どっかの駅とかで渡すだけでも、サっと。
あやめ　でも、ちょっ／駅はちょっと変じゃないですか？
楠木　そうですか？
あやめ　いやいや、別に変じゃないですけど。なんかね。そんな悪い事してるみたいじゃない？　ぷしゅー、はい、ぷしゅー、みたいな。
楠木　それは駅じゃなくて車両ですよね。
あやめ　はう。
楠木　え、じゃあ二人っきりでいいんですか？
あやめ　――あた・あた・あたしじゃあ、友達呼びます？
楠木　え？　ええ、ああ、はい。僕もじゃあ、今、友達と一緒に住んでて、そいつがあの、結構面白いやつなんでそいつ連れてきますよ、あの、ヒソップっていうやつなんですけど、
あやめ　あたしの友達はシトラっていうんです。
楠木　（観客に）そんな感じでシトラとヒソップは出会うことになったんです。僕とあやめさんはなんていうか、ちょっと、あんまり、そういう、パーティー的なものが苦手だったんで、あんまり、いい空気じゃなかったんですけど、ヒソップとシトラは本当にくだけた感じの二人だったんで、わりとすんなりいったみたいで、

ヒソップとシトラが少し離れた場所から楠木を呼ぶ。あやめも二人と一緒にいる。

シトラ　おーい！
ヒソップ　楠木ィ！

楠木、観客に会釈をしたのち、三人に合流する。

仲人　パーティー的

ヒソップ　どうするこの後？　別行動にする？
楠木　え、あれ、まだ帰らないの？
ヒソップ　ええ？　だってまだ、全然早いじゃん。
シトラ　（あやめに）この後、二人でどっか行くでしょ？
あやめ　あたしが？　なんで、え、どこ行くのこんな時間に？
シトラ　知らないけど。でも、なんかそんなムードだったじゃん。
楠木　☆ああ。
あやめ　☆ええ？　あたしそんなムードだったの？　そんなムード、え、ごめんちょっと正直に聞くわ、それ何、どんなムードなの？
シトラ　わかんないけど。（楠木に）え、でも、そんな感じでしたよねお互い？
楠木　（硬く）いや、僕は別に――。
あやめ　うそー。下がるわー。そんじゃなに？　あたしだけムード出してたってこと？　それ思うにひとえに最悪のパターンじゃない？
楠木　や、そうじゃなくて、そういうことじゃなくて、
ヒソップ　楽しく話してたんじゃない？　みんなで。ね？
楠木　うん。そ、その可能性も否定できないですよね。
ヒソップ　じゃ、俺、シトラさん送ってきますよ。モノレールでしょ？
シトラ　ああ、はい。ありがとうございます。
楠木　あ、そう？
あやめ　あ、うん、あ、じゃあ、あた、あた、しはあの、
ヒソップ　楠木が送りますよ。（楠木に）ね。
楠木　その可能性も否定できないですね。
ヒソップ　いけよ早く。肯定しろその可能性を。
あやめ　あ、でも、やっ、あたしあの、帰ります。門限が、というか正直、チタンの出る番組がもう
あの、間に合わなくなっちゃいますんで、セルフ・セルフの門限を発動させたいなと、
ヒソップ　うん、だから帰ったらいいんじゃない？　送るから。彼が。
あやめ　あ、はい。はいはいはい。
楠木　どうぞこちらへ、マドモアゼル。

楠木、あやめをエスコートして退場。

仲人　初対面の夜

シトラ　ヘンな二人ですね。
ヒソップ　うん。楠木もヘンなヤツだけど、あの、あやめさんていうのも、相当、変ってそうだよね。
シトラ　いい子ですけどね。ちょっと不器用ですけど。本当に優しい子で。
ヒソップ　うんうん。そんな感じするね。
シトラ　はい。って、あんまり知らないんだけどね、実は。
ヒソップ　あ、そうなんですか？
シトラ　うん。今日で会うの五回目ぐらい。
ヒソップ　なんか友達少なそうですもんね。
シトラ　あー、ちょっと暗い感じっていうか？
ヒソップ　あ、いや、なんか少ない友達と狭く深く付き合うタイプっていうか。あ、でも、シトラさん五回目だ。
シトラ　まだそんな深くは――
ヒソップ　ですよね

二人、少し笑う。

シトラ　うまくいくといいですね、あの二人。
ヒソップ　なんでですか？
シトラ　え、だってうまくいかないより、いく方が良くないですか？
ヒソップ　そっか。――あ、そうかもしれない。
シトラ　ねえヒソップさん、明日の天気とかってわかります？
ヒソップ　うーん、雨じゃないですか。
シトラ　えー？　せっかく休みなのに。
ヒソップ　あー、でも晴れ、かもしれないですよ。なんとなくいったんで。
シトラ　なんとなく？　え、ヒソップさん、もしかして空みただけで天気わかっちゃう人ですか？
ヒソップ　いやいや、全然そんなんは無いですけど、なんか、天気わかんない時は、ま、だいたい雨だと思っとけば、ね？　晴れたら得したみたいな気分になるじゃないですか？　ラッキーって。
シトラ　それじゃ晴れても何にもできなくない？　予定立てておかないとさあ。
ヒソップ　どうせ何にもしないんですもん。休みなんて。
シトラ　明日お休みなんですか？
ヒソップ　はい。あ、なんか予定あるんですかシトラさん？
シトラ　なあんにも。
ヒソップ　一緒じゃん。
シトラ　や、そうなんですけど。
ヒソップ　あー、――じゃあもしも明日、晴れてたら会うことにしませんか？

シトラ　んー。――雨だったら会いません？

◆音響　曲in　雨の日のデートのテーマ

ヒソップ　どうして？

シトラ　だってそしたらどっちにしろ楽しいじゃない？　晴れなら晴れで楽しいし、雨なら雨で、ね。

ヒソップ　じゃあ、そうしましょうか。（観客に）そうして翌日は雨でした。

二人　ザー。

楠木　二人が結婚したのはそれから三ヶ月後のことです。

投合

投合1　広い家

楠木　それまでは、ヒソップは僕と二人で暮らしていたんです。それ以上でもそれ以下でもないような二人暮し。だけど幾人かの人達は僕たちの暮らしをやっかんだんです。要するにその人たちは何がいいたかったかというと＝

ヒソップ　＝お金があるからって／お金があってもさーあ／お金持ちのやることはこれだからほんとねえ＝

楠木　＝確かに僕が有能かどうかはわかりません＝

ヒソップ　＝だけどこいつには金があった＝

楠木　＝それがみんなの気に入らないことはよくわかっていたんです＝

ヒソップ　＝私は違います＝

楠木　＝僕は大抵の人よりもお金を持っていたし、お金を持っている大抵の人よりも若かった＝

ヒソップ　＝僕たちは二人で暮らしていたんです。それ以上でもそれ以下でもないような二人暮し。広い家があんまり寂しかったのか、楠木は僕に二六ある部屋のうちの一つを貸してくれました。（楠木に）てことで、よろしく＝

楠木　＝おーす。（観客に）っていっただけで彼は家賃もなしにルームをシェアすることにお礼の一つもいいませんでした。でも、だからこそ僕は気楽にやれたんですけどね。それにヒソップは、プリンキャンドルを作るのがとても上手だった。

ヒソップ　毎日、おまえの分のプリンキャンドルも作ってやろうか？

楠木　じゃお願いするよ。

ヒソップ　てことで、よろしく。

楠木　とか、そんな調子＝

ヒソップ　＝僕はなんといっても貧乏でしたね。職業はゲロ拭き屋。名前がひどいですか？　ゲロ拭き屋。ゲロをね、こう、拭くんですよ。これはあの、一日の初めにその日一日にゲロを吐く人のリストってのを貰うんですね。で、それを見ながらゲロ吐く人を順々に回っていって、そいつが嘔吐するや否や吐瀉物に向ってオガクズを撒き散らすんです。はぁい！（撒き散らす動作）　でっかいゲロ袋を抱えて深夜から早朝にかけてあっちいったりこっちいったりして。こうあの、電線に？　トロッコみたいのをつけて「ロープウェーイ」みたいにして移動するんですね。で、仕事終って家に帰ってくるんですけど、なんかイライラしてるんで、そのまま寝ちゃうんですよなんもしないで。それでガーッと寝ててタ方ごろになって起きてきて、起き抜けに銭湯に行くのが一番の楽しみでしたね。

ヒバリ　カラン。コローン。カラン。コローン。

ヒソップ　それでまたゲロ袋を抱えて町に出る、そういう仕事でした。もうゲロ袋はホント重いんで嫌だったんですけど、ロープウェーイは好きだったんで、楽しかったんですよね。みんなあんまり、あ、楠木とかも、いい仕事だとは思ってくれなかったんですけどね。ま、クサいですし。でも自分は結構、――うん。あ、そうそう、その楠木なんですけど、ヤツが金持ちになったのにはちゃんと理由があって、ヤツは別にボンボンとかじゃなくて、あの歳で仕事に成功したんですよ。ヤツは犯罪者なんですねホント立派な＝

楠木　いやまあ――。

ヒソップ　＝大体、二十代とかで新聞に名前が載っちゃうほど活躍するっていうのは、もうスポーツ選手とか芸能人とかそういうのじゃないですか？　でも彼は犯罪者として、何度も何度も新聞の一面を飾ってまして＝

楠木　＝ちょっちょっちょっと待ってよ！　（観客に）あの、誤解しないで欲しいんですけど、僕は確かに銀行強盗をしたり、現金輸送車を襲ったりして大金を掴んだんですけど、そういったお金はちゃんと国に返してますから。というかですね、わかりやすく言えば僕は犯罪者という名の公務員なんです。で、これを説明するにはこの国で現在採用されている犯罪抑止の制度、

ヒソップ　designated hunting system

楠木　「指名狩猟者制度」略してＤＨ制について説明しなくちゃいけません。このＤＨ制ていうのを発案したのが他でもありません、チタンカーメンズの二人なんです。

◆音響　曲in　チタンカーメンズのテーマ。

あやめ　ま、実際はセージが一人で考えてると思うんだけど、

楠木　そうなんです！　彼等はこの国で初めてコンビとして閣僚に任命された、大臣になったお笑いコンビなんです。

投合2　犯罪者

チタン・カーメンズ登場。

ネロリ　はい、どーもー。ネロリでーす。
セージ　セージでーす。
ネロリ　チタンカーメンズです、と。
セージ　はーいどうも。今日はまじめな話なんですけどね、この、ＤＨ制について。というわけで、えー従来の、犯罪取締まりには大きな誤解があったんですね。今までは、とりあえず防犯防犯っていって、犯罪を起こさせない？　犯罪者をゼロに近づけようと頑張ってきたんですけれど、俺、考えたんすよ。やっぱそれは無理あるなって。世の中にはある程度、犯罪っつうのがどうしても必要になってくるんで、ま、いわゆる必要悪っていうやつなんですけど。
ネロリ　（ゆっくりはっきり）必要とされる最低限度の悪行、それすなわち必要悪。
セージ　――おまえ、何を補足したんだよ今。
ネロリ　セージ君の心を。
セージ　片腹痛えわ。で、俺は犯罪はゼロにはなんないぜ？　っていう風に考えたんで、だったらそれこっちで用意すりゃいいんじゃね？　っていうことなんですよ。これからの警察は、優秀な犯罪者を育ててそれを社会へ送り込む、って言う風にしようと思ってて。いつ、どこで、どんな犯罪が起こるべきかっていうのを事前に計算して、ちゃんとした奴が、ちゃんとした犯罪を起こす。で、それをやる「ちゃんとした犯罪者」っていうのが、要するにこの、ＤＨなんですね。
ネロリ　たとえばデニー・ジョップっていますよね？　彼は一人の人間ですよね？　でも、ある時は海賊になったり、ある時はジプシーになったり、古書のバイヤーになったり、チョコレート工場になったりしますよね。
セージ　工場にはならないけどね。
ネロリ　サランヘヨ。で、ジョップのやったことを多くの人が知っているのに、ジョップ自身の人生はそれとは関係ないじゃないですか。ないですよね？　だから映画の中でジョップが何回罪を犯しても、実際のジョップが罪を負うわけじゃない。だからジョップがジョップとしてやったことと生身のジョップの罪は別で、ジョップはジョップでも別のジョップというか、ジョップのジョップによるジョップのための犯罪と一口にいったところで、
セージ　★もうもうもう、ジョップの話はいいや。
ネロリ　サランヘヨ。ＤＨっていうのは、何回殺人を犯そうが、強盗を犯そうが、それがちゃんとあらかじめ決まっているものだったらＯＫなんですね。そりゃ勝手にやっちゃダメですよ。一発でも多く殴ったらいけないし、一銭でも多く盗んだらいけない。したがってＤＨには、高い倫理感と知力体力両面でのマルチな能力が求められるわけですよ。
セージ　もちろんこの制度への批判もありますけどね、でも、グダグダ言った所で実際、犯罪の管理に関しては、ある程度の成果を出てるんですよ、現実として。――多分ね、このあたりの喋り方がスカしてるっていわれるんだと思うんですけど、もうしょうがないんですよね。
ネロリ　しょうがないそうです。
セージ　片腹痛えわ。ありがとやんしたー。

ふたり、退場。

楠木　えー、とはいっても、自分、まだまだＤＨの中では新米なんで、ちっちゃい事件ばっかり担当してるんですけど、

ヒソップ　また載ってるじゃねえかおまえ！　これこれこれ！
楠木　ええ？
ヒソップ　楠木容疑者は、お年寄りに墓地の購入代金といって金を出させ、その金でカジノを建設、運営してその儲けを慈善事業団体に寄付した疑い――、
楠木　老人の金を老人に返しただけさ。
ヒソップ　無駄な一周。お、これすごいな、楠木容疑者、スーパーマーケットの商品を根こそぎ万引き、ってもうそれ万引きじゃねえだろ。
楠木　限界に挑戦したのさ。
ヒソップ　楠木容疑者、グラマーな女性に成りすまし、道行く男性三十人を次々に痴漢の容疑で冤罪告訴。
楠木　それは――、限界越えてたね。とまあ、そんなような仕事です。僕たちは二人で暮らしていたんです＝
二人　＝それ以上でもそれ以下でもないような二人暮し＝
楠木　＝だけど、その二人暮しも解消です。
二人　ザー

◆音響　曲in　結婚式のテーマ

ヒソップ　出会って3ヶ月後に僕とシトラは結婚式を挙げることになったんです。
ローズ　（少し離れた場所から）どんな結婚式―？
ヒソップ　そりゃ良いもんでしたよ。僕たちはね、神様と話をしたんです。神様も貧相よりは豪勢なほうが好きみたいだったし、楠木のおかげで僕らは盛大な結婚式を挙げることができたんです。
ローズ　ああ、神様！　神様！

猫の声。犬も混じってくる。それが女のあえぎ声になる。

結婚

結婚1　：初夜

あやめ　ぁぁ、ああ、そこそこ。
楠木　うわー。こんなにびっしょりじゃないか。もうぐちょぐちょ。
あやめ　言わないでそんなこと。

楠木　めちゃくちゃにしてやるよ。
あやめ　ダメ、こわれちゃう。
楠木　じゃあ、やめてもいいのかい？
あやめ　いじわるしないで。
楠木　さあどうして欲しいのかいってごらん。
あやめ　いえない。
楠木　いってごらん。
あやめ　いえない。
楠木　いってごらん。
あやめ　んんー、こわして！　めちゃくちゃにしてこわして！
楠木　うわー。うわー。
あやめ　ああー。ああー。すごい。大きい。固い。強い。速い。
楠木　きれいだ。丸い。なんか、いい。感じが、いい。とっても、いい。
あやめ　すごい。大きい。固い。強い。速い。
楠木　きれいだ。きれいだ。きれいだ。きれいだ。
あやめ　ああーやばいやばい。いくかも。
楠木　いくかも。
あやめ　いっちゃういっちゃういっちゃういっちゃう。
楠木　あー俺もいきそう。いくいくいく。
あやめ　来てー来てー
楠木　一緒に行こうー
あやめ　あああ――！

二人、ふいに静かになる。

楠木　とか、そういう展開でいければいいんだろうなってことは頭ではわかっているんですけど。
あやめ　身体が反応しないわけですね。
楠木　――すみません。
あやめ　★いいですいいです！　あたしのほうだって全然こう、準備万端じゃなかったですし。
楠木　役立たずですみません。あ、これがほんとの「役立たず」なんて――。
あやめ　――駄洒落は嫌いです。なんだか笑いを強制されている気がして。
楠木　いや、別に強制するつもりはないよ。
あやめ　でも、今のってやっぱり、
楠木　いや、そんなつもりはないって。よくないもんね。笑いを強制するのはよくない。そもそも駄洒落なんていうのは前頭葉の退化した中高年が苦し紛れに最後にヒリ出す笑いの産業廃棄物のようなものだよ。本当にすみませんでした。
あやめ　そんなあの、あたしこそ、抱き合ってるのにあの――、うーん――ときめき？　ときめかないのは誰のせいですか？

楠木　さあ。――え？
あやめ　なんか女の子はよく言うじゃないですか、ドキドキするとか、きゅんとするとか、
楠木　じゅんとするとか
あやめ　言ってません。
楠木　言ってません。イグザクトリー。
あやめ　楠木さんのせいじゃないような気がするんです。あたしがときめかないのって別に。
楠木　――そうかぁ。
あやめ　はい。
楠木　あやめさんあの――、この先もずっとこういう事がうまくできなくても満足してもらえますか？
あやめ　満足って、何に？
楠木　え。ん――。だから――
あやめ　あなたに？
楠木　うーん
あやめ　満足ですか。
楠木　――あ、や、もういいです。別に答えてくれなくて、大丈夫なんで、
あやめ　★いやいやいや、（答えますよ）
楠木　★ごめんなさいなんか
あやめ　★いやいやいや「満足」でしょ？　んー。するのかなぁ――。え、じゃあ、あの、たとえば、たとえば今日、楠木さんは満足でした？
楠木　――満足でした。
あやめ　てことは、あたしも満足かな。
楠木　いや、――ってことは、って。
あやめ　楠木さんが満足してくれることに満足しているんです。
楠木　そうですか。
あやめ　はい。
楠木　――じゃあ、僕は不満です。
あやめ　――じゃあ、あたしも不満になっちゃいました。

間。

楠木　そういうことじゃないと思うんです。だって、自己満足じゃない満足なんて無いじゃないですか。
あやめ　いい言葉ですね。セージの言葉ですか？
楠木　違いますよ。誰の言葉だっていいじゃないですか。
あやめ　はい。

一拍。

楠木　もう会ってもらえないですよね？
あやめ　――え、なんで？
楠木　え、いいんですか？
あやめ　いいですよ。はい。――あ、ダメですか？
楠木　いや、いいです。僕は全然、いいんだと思います。
あやめ　あたしも全然。
楠木　あ、そうですか。へー？　あ、そうですか？
あやめ　あたしたちってあの、気が合うっていうことになるんじゃないですかね？
楠木　――気が合う。
あやめ　はい。だから、ずうっと先の未来では、仲良くなれるんじゃないですかね？　楠木さんとは仲良くなれるかもしれないって思うんです。あたし、あんまりそういうことを思った事がない人だからあの、これは正直、すっごく珍しい事で。
楠木　はいはいはい
あやめ　ってなんか何いってんだって感じなんですけど、なんかホント、あんまりないことなんです
楠木　わかります。わかる、と思います。僕も、僕たちは似ているのかもしれない、なんて思うんです。あやめさんも、本当に一生懸命に何か、こう、――モノを好きになる人だなぁって

一拍。

あやめ　仲良くなれるといいですねえ。
楠木　あぁ。いいですね。だといいんでしょうねぇ。
あやめ　まあ、ゆっくり見守っててやってくださいよ。
楠木　ええ。そうするように、ええ。

しあわせの時間。

楠木　あ、そうだ、プリンがあるんです。良かったらいかがですか？　ヒソップが作ったやつなんですけど、あいつ、ああ見えて結構、こういうの得意なんですよ。これあの、プリンキャンドルていうんですけどね、
あやめ　プリンキャンドル？
楠木　燃えるんですよプリンが。ガラスに入ったプリンに火をつけるとそれはそれはきれいですよ。プリンに芯が刺さっていてそれに火をつけるんです。

◆音響　曲in　プリンキャンドルのテーマ

楠木　これだけを明かりにして食べるのも、なんかいいでしょう？　そうするとプリンのいい匂いが部屋中に広がるんです。でもたまに気をつけていないとお腹の中に火がついてしまうんですけどね。

まあ、そうなった時にはお腹用の消火器っていうのがあるんで言ってくださいね。あれ？　どうしたんですか、あやめさん、

あやめ　――あ、いや、ごめんなさい。本当ごめんなさい。あの――

楠木　え、え？　そんな謝らないで下さいよ、え？　何が？

あやめ　アレルギー

楠木　アレルギー？

あやめ　卵アレルギーなんで、プリンはあたし――

楠木　ああ――。（あれこれ考えて）――あ、僕もだ！

◆音響　fadeup　曲が大きくなっていって場転。以下、かけ続ける。

結婚2　結婚は水の底

サンダル　えー、結婚の秘訣は平行線と我が家では申しておりまして、その意味するところは、近づけるかと思えば近づくことはできないし、離れるかと思えば、やっぱり寄り添ってついてきてくれるというわけです。期待しすぎるのは人間、間違いのもとですが、長い人生、つかず離れず伴走（ばんそう）してくれる平行線があるってのは心強いもんです。ユークリッド幾何を越えていつの日か、無限に遠いどこかの横丁で、二つの平行線が交わる時が来るかもしれません。それではお二人の門出を祝って、無限遠点でお会いましょう。無限遠点で。

ヒバリ　どこにいるのー？　神様？　神様？

ローズ　神様、なんてものが本当にいると思っているの？

イラン　神様がもしいないなら、この世には罪という罪がないはずだもの。でも罪はここにある（自分の胸に手を当てて）。そんなら神様がいないはずないわ。

ローズ　いつもいつも何もかも取り返しがつかないのよ。

ヒソップ　いつもいつも何もかも取り返しがつかない。あの頃はよかったなぁ。

シトラ　そう？

ヒソップ　あの頃はよかった。

セージ　あの頃のおまえらはよかったよ。

ヒソップ　僕はいつからこんな罪を、罪悪感を背負い込んでしまったんだろう？

別の場所にカミサマが登場。

カミサマ　へいへーい。せっかくの結婚式だってのに罪悪感の話とはどうしたことだよ？　それよりサーフィンしようぜ、サーフィン。俺、近頃、友達にボードもらって初めてやったんだけど、全然、できないのなあれ。で、やっぱ夏の内に上手くなっとかないとだって、冬場とか、みんな気合入っちゃってるからさ、ヘタクソがすげえ浮くんだわ。――って、浮くんでしょ？　だからそれまでに上手

くなっておきてえんだよー。なあ、やろうぜサーフィン、よお！　え？　俺？　誰だよって？　そりゃお前、――カミサマだよ。

イラン　多分、神様にも赦(ゆる)すってことはできないわ。この私がいる限りこの罪がここにある。

シトラ　だったら神様もそこにいる？（イランの胸を指して）

イラン　いないわ。ここにだけはいない人が神様だもの。

シトラ　じゃあ、どこにいるの？

イラン　いないわ。ここにだけはいない人が神様だもの。

ヒバリ　どこにいるのー？　神様―？　神様―？

◇音響　曲out　プリンキャンドルのテーマ

パルマロ　結婚式が終わった後、シトロネラとヒソップは二人だけの寝室で随分と長い事まどろんだ。

ヒバリ　どれぐらい？

パルマロ　二人の爪が四十センチも伸びるほど。二人は長い爪に半魚人のネイルアートを施して部屋を出る。

シトラ　こんなとこに、プールなんてあったんだね。

ヒソップ　あるよ。あるある。人間がいるっていうことは水があるっていうことはプールがあるっていうことだもの。

ヒソップ、飛び込み台のある場所へ移動する。

ローズ　随分と高い飛び込み台から、

パルマロ　足のすくむような高さから、

ローズ　深い緑の水面に向って、飛び込み台に立ったこと自体を少し後悔しながら、

ヒソップ　だけどその後悔は、今からならやめられるっていう第二種の後悔じゃなくて。もう、帰る事はできないんだっていう第一種の後悔で、とても税金が高くつく。

複数のシトラたち　おいでよ！

◆音響　曲in　飛び込み台のテーマ

セージ　というシトラの声を遠くに聞きながら、ヒソップは踏み切り板を強く蹴りだす、えいっ！

ヒソップ、飛び込み台から飛び降りる。

パルマロ　ひゅーん　ひゅんひゅーん
ローズ　プールから上がった直後にシトロネラは貧血を起こして倒れ、そうしてそのままベルガモット先生に病に冒されたことを宣告され、以後、彼女の心臓が鼓動を打たなくなるその日まで一日たりとも病気を忘れて日を跨ぐことはなかったのだけれど、
パルマロ　そんなことを飛び込んでいる最中のヒソップが知る由もなく、
ローズ　ひゅーん　ひゅんひゅーん。
パルマロ　彼は最短距離で水面に近づいていく。もし、そのことを彼が知っていたのなら。もし、そのことを彼が知っていたのなら。ヒソップは水面を突き破るのを止めて、急旋回してなんとかもう一度、踏み切り板の上に着地しようと頑張ったに違いない。
ローズ　だけども彼は知らなくて。素直に水面を突き破る。
パルマロ　突き刺さる！

移動。照明変化。水の中になる。

イラン　水の中ではすてきなテレビ番組がやっていて、そこにはもう言葉はなくって、声を出している人はいっぱいいるんだけど、もうあんまりどこの国の言葉だとかそういうことは問題じゃなくて、テレビ番組には猫がたくさん出てきて、猫。猫。猫。
ローズ　怒っても猫。
シトラ　泣いても猫。
パルマロ　嬉しくても猫。
ローズ　楽しくても猫。
パルマロ　嬉しくても楽しくても猫。
ヒソップ　そうでなくても猫。
イラン　そこには美しいとか醜いとかはもうなくて、かわりに嬉しくても猫と、哀しくても猫がそこにいる。
俳優たち　にゃおーん。にゃおにゃおーん。にゃにゃー。にゃー。にゃー

俳優達、口ぐちに猫の鳴き声。犬もいる。

カミサマ　なんだよさっきから、うるせえな。
ローズ　ほらごらん、神様の猫も祝福しているよ。
ヒバリ　本当だ、神様の猫だ。
ローズ　うわー、きっとものすっごいありがたいことを言ってくれるんだろうなぁ。
パルマロ　そうねそうね。
イラン　神様の猫！　お祝いの言葉を下さい！
ローズ　お祝いの言葉を！
パルマロ　神様の猫！
ベルガモ　――ぱ。

ローズ　ぱ？
ベルガモ　ぱみゃーーぁぁああ！

大勢の人間がいっせいに喋りだす。口笛。

◇音響　曲out　飛び込み台のテーマ

ヒソップ　ぱみゃーとかじゃなくて、何かもっと大事なことが一杯あったような気がするなぁ――。何かもっと大事なさ――。
シトラ　そんな大事なことは忘れちゃってもいいけどさ、それを忘れちゃうぐらい、ぷかぷかした気持になってる今のことは、忘れちゃいけねえよおー。
ヒソップ　よおー。
シトラ　あたし昔にもこうやって水面を下から眺めてたことがあった。
ヒソップ　へー、いつのこと？
シトラ　あたしがまだちっちゃい女の子で、スカートよりもキュロットが好きで、おままごとよりも野球が好きだった頃。あたし、ママと一緒にミズウミに遊びに行ったの。それでなんか茶色いかわいくない鳥のボートに乗って、ママと二人でキコキコ漕いだのよ。
イラン　ヒ・バ・リ。
シトラ　あたしヒバリのボートから落っこちちゃったの。ミズウミには睡蓮の花がとてもきれいに咲いていて、あたし、子供の頃きれいな花を毟りとるのが大好きだったのね。だからあたしボートの上からその睡蓮を毟ってやろうと思って、睡蓮の葉に手を伸ばして、
イラン　ぴちょーん

◆音響　曲in　水中テレビのテーマ

シトラ　そしたらあたし、ミズウミの中にスーって吸い込まれていったの。スーって。水の中では大きな音が聞えてて、口ん中にも鼻ん中にも一杯水が入ってきて、頭がキーンってなってすごく痛くなったの。――ゆっくりゆっくり、あたしは下のほうへ沈んでいくの。ゆっくりゆっくり。それであたし、ママのことを何度も呼んだのよ、
ヒバリ　ママー。ママー。カミサママー！　カミサママー！
シトラ　ママは返事をしてくれなくて。いつまでたっても返事をしてくれなかったの。

シトラはいっしか気を失って倒れている。

ヒソップ　シトラ？　シトラ！　しっかりして、シトラ！

◇音響　曲out　水中テレビのテーマ

3 垂線　ちっともわからない

診察

診察　半地下　2

ローズ、プラムのソーダ水を飲み干して机にその瓶を置き、

イラン　ど・な・たー？
パルマロ　ここで場面は最初のシーンに戻ります。
ローズ　じゃ、夕飯は食べてくるから、なんかあんた適当に食べといてよ。
イラン　帰ってくるの？
ローズ　多分ね。わかんないけど。
イラン　ふうん。いってらっしゃい。
ローズ　うん。（あやめに）それじゃごゆっくり。
あやめ　あ、はい。どうも。

ローズ、退場。

イラン　——どうせまた男のとこなのよ。あの人。
あやめ　そうなんですか
イラン　なんかみみっちくて。あのね、あの人は男のトコに置いてもらいたがっているんだけど、相手は多分、別の女がいるわけなのよ。だからあの子は暇な時だけ、こんな感じに呼ばれて、やることだけやってぇ——。
あやめ　はあ——。
イラン　一応っていうか、まあ、いとこなんだけど、実際にはお手伝いさんみたいなもんよね／なんかとることにしましょうか？　ピザかなんか取る？　ピザ嫌い？
あやめ　あんまり
イラン　どうして？
あやめ　あたし体質がちょっとあれなんで、ああいう何入ってるんだかわからないものはなんか。
イラン　あぁ、そう。だからそれも飲まないの？
あやめ　まあ——。

間。写真を見ているイランイラン。

イラン　——あなた本当にお腹空かないの？　大丈夫？
あやめ　はい。あの、なんでしたら、どこか食べに行きましょうか？

イラン　んーんいいの。あたし、ウチから出るの嫌いだから。人に会う時は絶対、来てもらうことにしてんのよ。
あやめ　それもなんだか――。
イラン　――なに？
あやめ　ちょっと、不健康な感じですね。
イラン　そんなことないのよ、すこぶる健康。あー、でもシトラもさ。健康にだけは自信があったのに、新婚早々に家に担ぎこまれちゃってねえ。
あやめ　はいはい。
イラン　なかなか難しい病気だったらしいのよ。あのね、あたし達、同じ先生に診てもらってたの。毎年あたしの健康診断をしてくださっている先生がいてね、ベルガモット先生という人なんだけど、その人がいろいろと教えてくれたのよ。

診察　往診イラン

ベルガモット、登場。

ベルガモ　はい。今年の健康診断も百点満点です。
イラン　やった！
ベルガモ　しかし、一年中一歩も外に出ないような人がケチをつけるところが無いほど健康だっていうのも皮肉なもんだね。私はムカつきます。
イラン　すみません。
ベルガモ　ま、去年より若干体重が減ってしまっているみたいですが。
イラン　でも、食べるものはちゃんと食べてますから。
ローズ　なに言ってんの、大して食べてないでしょうが、
ベルガモ　ちなみにローズヒップはここ一年で太りすぎだよ。
ローズ　はい。
ベルガモ　見えないところで太りすぎ。もちろん、見えるところも。
ローズ　はい。
あやめ　ご飯を食べないんですか？
ローズ　っていったって別に拒食とか過食とか、そういうことじゃないんだよ。
イラン　普通に、食べない？
あやめ　食べるのが嫌いなんですか。
ローズ　あんまり好きじゃないみたい。
イラン　あ、でも、あたし野菜ジュースとかすごい飲むのよ。だから、うん、めちゃめちゃ健康ですよ、かなり自信あるかもしんない。
ベルガモ　そりゃ良かった。本当の健康というものがあなたに訪れるように祈っときますよ。
ローズ　お医者さんなのに神頼み？

ベルガモ　医者ほど「無力」って言葉の意味を熟知してる人間はいませんよ。完璧なオペをしたつもりになって次の朝を迎えたら患者がセミの抜け殻になっていたり、かと思えばすぐにもカニの甲羅になっちまうだろうと思った患者が五年も六年も飛び回っていたりするんだから、
ローズ　ハイハイ大変なお仕事で。
ベルガモ　水も飲めない人だっているんですから、ちゃんと食べなくちゃ罰があたりますよ。
ローズ　なに、水も飲めない人って？
ベルガモ　シトロネラっていう子が罹ってる奇病なんだけどね、彼女は、今、一日にほんのわずかしか水を飲めないんだよ。
イラン　シトロネラ？
ベルガモ　どれぐらいわずかかっていうとさ、ほら、餃子を食べる時に醤油の中にラー油を落とすでしょ？　ラー油をね、スプーンに二さじ注いだぐらいしか水を飲めないんだ。
ローズ　――ラー油でたとえた意味！
ベルガモ　ははは。気づいたか？
ローズ　ちょっと、先生。
イラン　え、え、シトラ？　シトロネラっていったの今？　シトラはなに、そんなに悪いの？
ベルガモ　あ、そうだ、シトロネラさんはあなたの娘さんじゃないですか！　これは失敬。うかつの粗忽。（目が泳ぎながら）いや、なに、そんなに気にするほどの奇病じゃないんですよ。ほんのささいな奇病。いわば組み立て式の家具を作り上げた翌日に来る筋肉痛程度の奇病ですので。
イラン　あからさまにウソ臭いじゃないですか！

診察　往診シトロネラ

ヒソップ、楠木、登場。
場面変わって、シトラとヒソップの家になる。

ヒソップ　はっきり言ってください、これはあの、どの程度ヤバい病気なんでしょう？
ベルガモ　だからそんなに心配するような奇病じゃないっていってるでしょ。ただし、どんな病気でも油断は禁物ですがね。さてと、私は尻尾を巻いて帰りますが、何か聞いておきたいことは？
ヒソップ　すぐにパっとは思いつかないですけど。んー。
ベルガモ　じゃあまた！

ベルガモット、足早に帰りだす。ヒソップと楠木、素早くそれに追いすがり、

ヒソップ　本人もその！　まさか水を飲むなって言われるとは思わなかったみたいなんです。だって、ねえ？　水を飲まないでどうやって生きて行けっていうんですか？
ベルガモ　飲まないで、とは言っていません。
ヒソップ　でも――
ベルガモ　一日にスプーン二さじまで、と言っているでしょう。

ヒソップ　先生、それはあんまりです。
ベルガモ　安心なさい、それにはそれ用の薬がちゃんとあるんですよ。ほおら。

医者、紙袋から、海老の尻尾のようなものを取り出す。

ヒソップ　海老の尻尾
楠木　海老の尻尾
ベルガモ　海老の尻尾じゃありません。水分摂取量をコントロールするための補助薬です。変った形してますんで通称、海老の尻尾、と呼ばれてますが正式には、――海老の尻尾というんですよ、
二人　一緒じゃないですか。
ベルガモ　あははは。お二人ともお笑いがお好きで？
楠木　いいえ。
ヒソップ　これは一体どういう病気なんですか。
ベルガモ　奇病です。
ヒソップ　奇病はもうわかりましたけど、
ベルガモ　水を飲むと身体が、――ミズウミになってしまうんです。
ヒソップ　ミズウミ？
楠木　つまりその、尿の、排泄が上手くいかなくなるという、腎臓の病気っていうことだと――？
ベルガモ　いや違います。全然違います。どこで聞きかじった知識だか知りませんが全く違います。
楠木　すみません。
ベルガモ　どういたしましてどっこいしょ。そういうわかりやすいもんだったら何も私だって奇病なんて言い方はしませんよ。これは腎臓病よりももっとずっとわかりにくい病気です。（急に大声で）ま、もっとも！　腎臓病だって決してわかりやすい病気じゃないんだけどねッ！
楠木　――はぁ。
ベルガモ　そんなことよりほおら、子供の写真しご覧になりませんか？
楠木　え、先生の？
ヒソップ　お子さんがいらっしゃるんですか。
ベルガモ　二人いるんです。三歳と、五歳です。
ヒソップ　へえ、それはさぞかし――

写真を見る二人。

ヒソップ　わあ。
楠木　わあ。
ベルガモ　どうしました？
楠木　いえその。はははは。
ヒソップ　ははははは。

ベルガモ　その写真を見せると、正直者とそうでない者とがわかります。みなさん、三歳とか五歳の子供っていうのは無条件にかわいいものだと思ってらっしゃるようですが、実際にはこういう子供もいるんです。もちろん私にとってはかわいいんですが、正直者はそれを見て笑います。
ヒソップ　正直でない人は？
ベルガモ　泣きます。泣き真似をします。
楠木　（泣く）うう。う。うう。
ヒソップ　（泣く）うう。う。うう。はははは。
楠木　ははははは。

ベルガモット二人から写真を取り返して、そのまますぐに帰ろうとする。

ベルガモ　じゃあまた！
ヒソップ　先生！
ベルガモ　あなたの奥さんは奇病ですけど生きていくことはちゃんと出来るんですから、希望を持たなくちゃいけません。何を隠そう、私の二人の子供も同じ病に侵されている――、
二人　ええ！
ベルガモ　というのは冗談ですが、その歳で同じ病に侵され、哀れにもその命を空しくする子供がいるということは決して冗談ではありません！
楠木　――先生、笑っていいのか、いけないのかわかりません。
ベルガモ　いいですかヒソップさん？　世の中には笑い飛ばして済むことなんて一つもありません。一つもね。ただ、それでも人間というものは、つい笑ってしまう――。
一同　ははははは。

ベルガモット子供の写真を見せる。
途端に泣き真似をする二人。

楠木　うう。う。うう。
ヒソップ　うう。う。うう。
ベルガモ　ごきげんようまた来ます。
ヒソップ　ありがとうございます。
楠木　先生、さようなら。
ヒソップ　先生、さようなら。

◆音響　曲in　ウソ泣きのテーマ。

照明変化。舞台上、別の場所ではヒソップがシトロネラに水を飲ませている。

パルマロ　それからヒソップはベルガモット先生に言われたとおり、毎日スプーンに二匙づつの水と海老の尻尾をシトロネラに飲ませました。

ローズ　シトロネラの病状は悪くもならず良くもならず。
楠木　新婚の二人に僕はなんと言葉をかけたら良かったんでしょう。確実に言えるのはヒソップやシトラ以上に僕が哀しいはずはないんじゃないか、ということで、僕はだから控えめにその哀しみを哀しむことにしたんです。だから、また来るよ。さようなら。
ヒソップ　さようなら。

楠木、退場。

◇音響　曲out　ウソ泣きのテーマ。

別離

別離1　ヒソップも水が欲しい

シトラ、登場。

シトラ　帰ったの、楠木さん？
ヒソップ　うん。明日は一日で十六件も泥棒の仕事が入ってるから早いんだって。
シトラ　ねえ、ヒソップ、あんた水が欲しいんじゃない？
ヒソップ　ん？　水が欲しいの？
シトラ　ううん、ヒソップが欲しいんじゃない？
ヒソップ　俺？　は、ん？　そうかもね。でも、いいよ。
シトラ　――あたしの前で飲んだら悪い？
ヒソップ　悪いし、あと、別にいま喉渇いているわけでもないし。
シトラ　でも、絶対欲しいのよ。すごく欲しいの。本当は。
ヒソップ　なになになに。大丈夫だよ。
シトラ　ね、あたしがかかったのって、水が欲しくなっちゃう病気？
ヒソップ　飲むと悪くなっちゃう病気なんだって。
シトラ　なんで前より喉が渇くようになったの？
ヒソップ　そりゃ飲んでないからじゃない？
シトラ　うそうそ。
ヒソップ　ウソじゃないよ。俺だって一日にスプーン二匙とか？　そんなちょっとしか水飲めなかったらすごく欲しくなると思うもん。
シトラ　じゃあ、ヒソップも病気なんじゃない？
ヒソップ　俺は違うよ。
シトラ　なんで？
ヒソップ　え、だって。んん？　別に俺は、そんな。普通っていうか。体は別になんともない人だから。

シトラ　気づいてないだけだって。本当は、ヒソップもすごい水飲みたくなる病気に罹ってんだよ。あ、そうだ、絶対そうだ、けど、気づいてないんだよ。本当は、めちゃくちゃ飲みたがっているんだけど、今は飲めるから気づいてないの。あーあ、病気じゃん。
ヒソップ　そんなの誰だってそうでしょ。
シトラ　飲みたくない人だっているかもよ。
ヒソップ　それはないでしょ。水飲まないとだって――――うん。それは違うよ、
シトラ　え、なになに、水飲まないと何？　水飲まないと死ぬ？
ヒソップ　うん。みんなね。
シトラ　みんな死ぬ？
ヒソップ　飲まなかったらね。だからそう、だから、みんな水が飲みたくなる病気なんだよ。
シトラ　――じゃあ、どうしてあたしだけ飲んじゃいけないの？

間。

シトラ　ねえ？
ヒソップ　シトラ、ちょっと聞いて欲しいんだけどね、僕たちは引っ越さなくちゃいけなくなるかもしれないんだ。
シトラ　え？
ヒソップ　ていうか、なるんだ。僕はこの町を出なきゃいけないことになる。もうすぐ。追われる身になるんだよ。
シトラ　なになになに？
ヒソップ　いや、落ちついて聞いて欲しいんだけどね、楠木が今、困っちゃってるんだ。それであいつを助けてやることが出来るのは僕しかいない、ってそういう寸法なんだ。
シトラ　どういう寸法だか忍法だか知らないけどさ、な？　急すぎない？
ヒソップ　ちゃんと順を追って話すよ。ほら、あやめさんと楠木は付き合ってるじゃない？
シトラ　うんうん、付き合ってる。

別の場所にあやめ、楠木、登場。

別離2　焦点

楠木　ねえ、あやめさん。
あやめ　何？
ヒソップ　なんだか、ま、いろいろ問題があるんだけど、その核心に触れる部分みたいな話を、その、この間してみたらしいんだけどさ、
楠木　あのさ、もう二人で会っている時にチタンの話をするのはやめにしない？

あやめ　は？　なんで？　なんでなんでなんで？
楠木　や・正直言って僕は、お笑いやっているときの彼等が好きだったわけで、政治とか写真とか、っていう、今のスタンスには共感できないんだよ。
あやめ　そりゃあたしだってそうだけどさ、でも、彼等だって生活をしていかなくちゃいけないわけでしょう？　あれぐらい才能があったら、いろいろチャンスだってあるわけじゃない？　他の分野で挑戦したことが笑いに活かされるってこともあるわけじゃん、
楠木　うん。わかるんだけど、わかるような気もするんだけど＝
あやめ　＝でしょ、だったら＝
楠木　＝でも、僕等にだってさ、生活があるわけじゃない？　って思うんだよ、近頃。それに、前よりチタンに興味がなくなったってのはあれなんだ、――あやめさんに興味の対象が移った、っていうこともあると［思うんだけど――
あやめ　［え、え、え、じゃあセージの写真展も行かないってこと？
楠木　――うん。そうだね＝
あやめ　＝ありえないでしょ。だって、そりゃ普通のファンだったら彼等も最近はいまいち、で終りなんだけど、――待つことも必要じゃん？　ていうか、そんなん言うんだったら初期の輝き失った時点でとっくにファンやめてますっていう話なわけだからさ、て、あなたもそう［言ってたでしょ？
楠木　［うんうんうん。だけどさ、だけどね、あの、こんなこといっちゃあれなんだけどさ、最近の活動をフォローするためにはさ、時間だけじゃないでしょ？　お金だって相当かかっているよね？
あやめ　お金？　あぁ、お金のことがいいたかったの。あーあーあー。確かにあたしは――、あ、お金を出せって事？＝
楠木　＝そんなこと言ってないよ。僕はお金がないわけではないし、そうじゃなくて［僕がいいたいのは、
あやめ　［はいはいはいはい。あなたが苦労して稼いだお金をあたしが全部チタンにつぎ込んでしまうのは――、ってことよね？
楠木　――違うけど、まあ、そういう部分もないことはないよ。そりゃ少しは、
あやめ　★だったら、もうおしまいよあたし達。お金のことが心配なだけじゃない。あたしのチタンに対する思いとかどうでもいいわけでしょ？＝
楠木　言ってない、言ってないじゃない、そんなことは。
あやめ　＝ねー、もうさあ、一体、誰のお金でグッズ買ってるんだよって話だよね、
楠木　★ねえ、ねえ、どうしてそうなっちゃうの？　なんか、君はこのままじゃ、すごくつまらない人間になってしまうと思うよ＝
あやめ　＝放っといてよ。あたしが面白いか面白くないかはあんたに決めてもらわなくたっていいんだから。
楠木　誰がじゃあ、決めるの？　誰？
あやめ　関係ないじゃん。
楠木　それもチタンが決めてくれるの？
あやめ　言ってないし。
楠木　★決めてくれないよ！　だって、きゃれらはさ、君のことなんか今まで認識したこともない＝

あやめ　キャレラ、キャレラって――
楠木　＝そう知らないんだから君という人間を。そろそろ眼を醒ましたっていいと思うんだけどね。彼等は有名人であって君や僕とは何の関係もない。だから君は、――僕にとってすてきな人間であって欲しいんだよ。
あやめ　勝手すぎるんですけど。
楠木　★わかっているよ、でもさ、それでも、もしも君が俺にとって最悪な人間になってしまったとしたらね、［やっぱりもう、それは君の自由だっていう風には言ってられないんだよ。
あやめ　［は？　ちょっ、な、最悪？　最悪っていったの今？　あー、どうせ最悪の守銭奴ですよ、あたしは。自分に魅力がないからそれをチタンの追っかけやることで埋めているだけの女ですよ。そんなことは、もう、ね、親から親戚から友達から飽きるほど聞かされてきていることなんだから。どうして、あなたまで、チタンのすばらしさをわかっているはずのあなたまでそういうことを言って、全然――。もう――。

間。

楠木　僕たちは何も言うことがなくなってしまうんだね。
あやめ　そうなんじゃない。

あやめ、退場。

別離3　殺さなくちゃいけない

ヒソップ　随分激しい喧嘩をしたんだな
楠木　だから僕は、――僕がチタンカーメンズを殺さなくちゃいけない。
ヒソップ　いや、――それは違うんじゃない？
楠木　どうして？　あいつらが居る限り僕等はうまくいいかないんだよ。僕はあやめさんのことが好きなのに、あやめさんだって僕のことが好きなはずなのに、チタンのことで頭が一杯にされちゃってるんだ。
ヒソップ　うん。わかるけど、でも、殺すってのは大ゲサなんじゃない？　しかもあれだろ、おまえ　その、プロって言うか、ＤＨなんだからさ、そういうことしたら、
楠木　マズいよそりゃ。普通よりずっと重い罪になる。
ヒソップ　しかも相手、大臣でしょ？　警備だってすごいだろうし、危ないって。
楠木　これでも僕だって一応はプロだからね。それなりの技術は持っているつもりだよ。
ヒソップ　でも違うよ。うん。違う／とりあえず、やめようよ、それはなんか。
楠木　★いや、ダメだ。ダメなんだよ。絶対にこれをやっとかないと僕が殺されるんだよ。そう、殺　すか、殺されるか、っていう、そういう問題に最終的にはなっているからさ。
ヒソップ　なってない、と思うよ。なってない／え、どうした？　どうしたよ？　大丈夫？　大丈夫　かお前？

楠木　あー、わー、嫌だ嫌だ。君のさ、そういうところが嫌いなんだよ。なに？　なんだか自分ばっかりさ、冷静な人みたいな顔をして？　そうやってガキ扱いするわけでしょ僕のことを？
ヒソップ　いや、してないって。
楠木　★いやいやいや！　ホントさ、僕がお金を稼ぐためにどれだけの犯罪を犯してきていると思っているの？　君もさ、その金が無かったらぶっちゃけ結婚式とかできてないわけじゃない？　いやいや、それは本当のことじゃない？　それは言われたってしょうがないよ、君も。だけど生きるために僕だって相応の苦労はしてきてるのね、ちゃんと。［だから君がそうやってガキ扱いするのは違うんじゃないかって――、
ヒソップ　［うんうんうん、わかった、ごめんごめんごめん。
楠木　んー。――だから僕は別に大丈夫なんだけどね、あやめさんに、どうしても気づいてもらいたいんだよ。だって、このままじゃあやめさんダメになっちゃうからさ。そしたらもう、何もかもダメになっちゃうからさ。
ヒソップ　――どっちにしろお前がそんなことしたらダメになると思うけどね＝
楠木　＝じゃあどうしろっていうの？　――どうしろっていうんだよ！
ヒソップ　★知らねーよ。なんなんだお前。なに、いったい俺／何を求めてるわけ？　なんだよ。
シトラ　どうしたの？

シトロネラ、登場。寝起きである。

ヒソップ　ごめんごめん。ごめんなさい起きちゃった？
シトラ　あれで起きなかったら、どのミッションがインポッシブルだよ？
楠木　すみません、なんでもないんです。
シトラ　なんでもないのにあんなに大きな声で喋ってたら、それ何位決定戦だよ？
ヒソップ　（楠木に）ごめん、起き抜けはちょっとわかりにくいんだ。
楠木　五位――五位決定戦。
ヒソップ　答えないでいいよ。――（シトラに）ごめんごめん、あの、サイプレスとカンファーとどっちが首位打者になるかっていうことで、ちょっと二人とも我を忘れてしまってね。って、あ、もう寝てる。

シトロネラ、寝ている。

楠木　（シトラの様子を見て）――どうなんだ具合は？
ヒソップ　よくわからないんだ。正直全くの健康体みたいに思える時もあるんだけど、やっぱりダメなんだよ。油断してちょっとあちこち出歩くと、すぐに縁日で取ってきた金魚になってウロコがぼろぼろになっちまう。もう帰るの？

楠木、帰ろうとしている。

楠木　起こしちゃ悪いから。今度、またロブスターの尻尾を持ってきてやるよ。
ヒソップ　うん。本人はあまり喜ばないけどね。
楠木　良薬は口に苦しナントカっていうだろ。
ヒソップ　うん。全部言えてるけどね――。
楠木　そうとも言う。
ヒソップ　あのさ、もしも、俺がやったらどうなんの、さっきの？
楠木　――は？
ヒソップ　チタンカーメンズを何とかするって。もしさ、お前の持っている「技術」を俺に教えてくれればさ。
シトラ　あなた本気で言ってるの？
楠木　お前、そんなことしたら――。
シトラ　やめてよ冗談じゃない。あたし達どうなっちゃうわけ？
ヒソップ　まだやるとは言ってないだろ。なにか、いい「技術」があるんなら。
楠木　あるけど、あるけど。
ヒソップ　とりあえず、教えるだけ教えといてくれ。
シトラ　でもやるんでしょう？　教わるってことは結局やるってことじゃない。
楠木　うん――。これは難しそうだけど実は簡単で、残酷そうだけど実は親切な技術なんだけどね、

楠木、だんだんと退場。

別離４　離れ離れ

ヒソップ　ねえシトラ、落ちついて聞いて欲しいんだけどね、
シトラ　なんでそういうことすんの？
ヒソップ　難しそうだけど実は簡単で、残酷そうだけど実は親切な技術なんだ。
シトラ　はァ？
ヒソップ　俺がやらなければあいつがやってしまうよ。だから引っ越さなくちゃいけなくなるかもしれないんだ。ていうか、なるんだ。僕はこの町を出なきゃいけないことになる。もうすぐ。
シトラ　やめてって。あたし怒るよ。
ヒソップ　仕方ないだろ。俺はさ、こういう時にこそ何か出来る人間でなくちゃダメだと思ってきたんだよ。何か、人の為に自分を犠牲にできるのかどうか、
シトラ　あんた何トンネルよ？　どこに開通しちゃってんの？　あのね、それ全然、楠木さんの為にもあやめの為にもならないし、ていうか、あたしがこんな奇病にかかってるっていうのになんなのその態度？　お願いだからやめて。そういう風通しのいいことは。
ヒソップ　それはお願いしているの本当に？　全然、そんな感じがしないよ。
シトラ　じゃあ違うんじゃない？　してないよお願いなんて。やめて。やめちまえ。
ヒソップ　これじゃまるで喧嘩するために結婚したみたいじゃないか。
シトラ　そうなんじゃない？

ヒソップ　そうじゃないでしょ。
シトラ　自分で言っておいて、何？
ヒソップ　俺が悪いんだよ。俺が悪かったよ。
シトラ　悪いとも思ってないくせに。
ヒソップ　なんでそうやって決め付けるんだよ。
シトラ　思ってないでしょ、だって実際？　だって別に悪い事なんて何もしてないじゃないヒソップは？　だから考えるだけ無駄でしょ。悪いとか、良いとか、そんなのヒソップにとって都合がいいだけなんじゃないの？
ヒソップ　もうお金のことでグダグダ言われるのはいやなんだよ！　これから一生、あんなヤツに！

◆音響　曲in　お金のこと、のテーマ。

間。

ヒソップ　ごめんじゃあ。あの、シトラは一体、ていうか、どうしたいの？
シトラ　全然あたしの話聞いてないよね。一番最初に言ったじゃん。ねえ。
ヒソップ　そうなの？　ごめん。

間。

シトラ　引越しなんてしないからねあたし。どっか行くんなら一人で行って。
ヒソップ　でも君は、――どうするんだよ？
シトラ　さあ、別にどこにでも。いざとなったらママんところにでも行くよ。
ヒソップ　ママのところ――

場面転換。

◇音響　曲out　お金のこと、のテーマ。

4 波線　防げない

誘拐

誘拐1　半地下3

イラン　そうなのよ。あの子、病気になったのに引っ越さなきゃっていうの。あの子は嫌だって言ったらしいんだけど、ヒソップさんがどうしてもっていうからって。
あやめ　いや、ヒソップさんも望んでいたわけじゃないと思うんです。追われる立場になっちゃったから仕方なく――。
イラン　ん、ん？　何、追われる立場になったの、ヒソップさんは？
あやめ　はい。っていっても楠木さんが悪いんです。いや、むしろ、あたしが悪いんです、きっと。
イラン　あなたが悪い？　あなたが悪くてシトラが引越しをするわけ？
あやめ　だから結局、犠牲になってくださったんですよ、ヒソップさんは。あたし、楠木さんと揉めちゃったんですけどね、そのあとで彼が、最後にチタンのライブを観にいこうよ、っていってくれたんです。それで、もう、それが正直、最高にいい席だったんですよ。あたし、これはきっと最後なんかじゃなくてむしろ何もかもの始まりになる、って、その時は、そう、思ったんですけど、
イラン　（その話題には興味を示さず）うん、ですけど――？

◆音響　曲in　チタンカーメンズのテーマ。

あやめ　その時のライブでチタンは本当に大変なことになってしまって――。ライブの前までは、最高に平和だったんです。二人もすごい良い状態だったっていうか、あ、ていうのは、あたしたち、チタンがよく来るって言うお寿司屋さんに行ってさりげなく食べてたんですね、そしたら本当に二人が来て、すごい近くで食べていて、

場面、寿司屋となる。あめやと楠木のすぐ近くでチタンカーメンズが寿司を食べている。

セージ　お前、どうすんの？　お笑い。
ネロリ　ん、どうするって？
セージ　だから、――続けんの？
ネロリ　や、セージ君がよければね。だって、俺がネタ考えるわけじゃないし。
セージ　お前もちょっとは考えろよ。
ネロリ　どうせボツにされるし。
セージ　面白いの考えないからだろ。
ネロリ　無理なんだよ。面白くないって自分で思うから。だからセージ君に任せるよ、続けるかどうかも。
セージ　やめたらどうすんだよ。

ネロリ　奥さんとなんか――さあ？　仕事してのんびりするよ。
セージ　ホント、ノープランだな。
ネロリ　セージ君なんかあんの？
セージ　俺はおまえ、政治家一本でいくよ。
ネロリ　政治家かぁ――。今やってる時点ですごいよね。
セージ　おまえだって一応、大臣なんだからさ。
ネロリ　俺は名前だけだし。それで今度写真の個展もやるんでしょ？
セージ　おう。
ネロリ　忙しいなぁ――。

あやめ　だけど、あのライブでチタンは本当に大変なことになってしまって、

ネロリ　あ、ねえ今日さ、アンコールあったらやりたいネタあるんだけどさ、
セージ　おう、なんだよ？

場面転換。歓声。チタンカーメンズ、ライブ会場となる。

セージ　アンコールどうもありがとう！　これはもう、本当にありがたい話ですよ。
ネロリ　えー、それでは最後に思い出深いネタを一つ、ショートコント、「王家の思う壺」！

チタンカーメンズ「王家の思う壺」の触りだけ少しやる。

パルマロ　その時、マイクロフォンの中に隠れていたヒソップが、マイクロフォンから顔だけ出していったんです。

ネロリ　（マイクと一体化しているヒソップに驚いて）うおお！
ヒソップ　あの、お願いがあるんですが。
セージ　（ヒソップに）ん？　なに君。
ヒソップ　もう解散してください。チタンカーメンズ。
セージ　なん、なにいってんの？
ヒソップ　本当お願いします。本当にもう、この通り（頭をふかぶかと下げる）。
ネロリ　いや、あの、ちょっとそういうことされても俺らも困っちゃうんで、
セージ　それお前、いきなりマイクから出てきて言うことじゃねえだろう。
ヒソップ　ダメですか？　解散してくれませんか？
セージ　しねえよ。帰れよ。狭いとこ入りやがって
ヒソップ　じゃあ、しょうがないですね。

パルマロ　そういうとヒソップはマイクロフォンからにょろにょろ出てきたんです。

ヒソップ　うはあ、うあうあうあうはうあいやー。
セージ　何がしたいんだよ！
ヒソップ　もうこれは本当ちゃんと警告しましたからね自分は。本当に持って帰りますからね。どうなっても俺のせいじゃないないですよ。あの、ごめんなさい。マジに持って帰りますからね、
セージ　なに？　何を持って帰るの君は？
ヒソップ　あだたがたを。
セージ　あ？
ヒソップ　あだだがだ、
セージ　★カミカミじゃねえかよ！
ヒソップ　セェイ！

◆音響　曲in　カプセルのテーマ。

ヒソップ、持っていたカプセルを開けると、セージがその中に吸い込まれてしまう。

セージ　だう、だうはうはうあうあはうあうー。

誘拐2　半地下4

歓声。再びガヤガヤ。
ヒソップ、セージを収納したカプセル状のものを持っておもむろに帰ろうとする。

ヒソップ　あ、あの、解散してもらえればいいんで、お一人だけ、失礼します。

ヒソップ、退場。
別の場所にあやめ。

あやめ　ネロリはもともと全然目立ちたがり屋の人じゃなくて、セージがやるんなら、っていうんであの世界にもなんとなく入ったような人なんです。だから彼からセージを奪うなんてそんな――。だからあたしがなんとかしてあげなくちゃって。でも、なんにもできなかったんです。なんにも。

◆音響　曲in　ネロリインタヴューのテーマ。

インタヴューに答えるネロリ。

喋り手　ネロリさんは目の前でご覧になっていたわけですよね？
ネロリ　ええ、ま、自分もちょっとどういう状況、か、というのは、
喋り手　銃を持っていたということでしょうか？
喋り手　何か恨みを持たれていたとか？

喋り手　今後の活動はどのように？
ネロリ　えーと、いや、俺もあんましっかりわかってないんですけど、えー、なんか犯人？　が、なんだ、カプセルみたいなのをこう、パカっと開けたんですね、そしたらセージ君が、なんかぎゅーとこう、小さくなってしまって、姫、姫じゃないんですけど、「親指クン」みたいになってしまって、それで、そのカプセルの中にぎゅーっと詰め込まれ、たんですよね。
喋り手　ネロリさんは止めようとはなさらなかったんですか？
ネロリ　それは、――僕自身はその、びっくりしてしまいまして、ていうかホントに、びっくりしてしまいまして、（うんうん）はい。
喋り手　何か犯人に言いたいことはありませんか？
ネロリ　今、だから言いたいのはその、――返して欲しい、っていう。ホントもうそれたけですね。セージ君を返して欲しいです。もう、ほんともう返してほしいです。ホントだから、――返して欲しいですね。はい。

場面転換。

◇音響　曲out　ネロリインタヴューのテーマ。

5 直線　戻らない

出発

出発1　忘れ物

舞台上の別の場所、バットの素振りをするヒソップ。

楠木　あの引っ越した先でなんか、やる仕事とか大丈夫？

ヒソップ　うん。叢雲屋（むらくもや）するよ。

楠木　叢雲屋かあ。確かに叢雲屋はあんまりやってて気持のいい仕事じゃないし、あんまり誰からも歓迎されないとは思うけど、重要な仕事であることに間違いはないもんね。

ヒソップ　――お金がいいから。

楠木　ていうこともあるしね。ま、僕が送金とかすると足が着くかもしれないし、

ヒソップ　だからいいって。

楠木　うん――。やっぱり知らない土地で頼りにできるのはそれだよ。

ヒソップ　ゲロ拭き屋をしていたって楽しみを見出した男だよ？　叢雲屋ぐらいなんだ。

ヒソップ、カプセルを振ってみる。

楠木　忘れ物とか大丈――、あんまり振っちゃかわいそうだよ。どっか、ちゃんとした所に着いてから開ければいい。

ヒソップ　わかった。

楠木　あとは出たとこ勝負だな。

ヒソップ　別に勝負じゃないけどな。

楠木　勝負じゃないけど、デタトコナントカだね。出たとこ――きゅっ。

ヒソップ　――あ？

楠木　とにかくちゃんと逃げ切って。これで君が捕まってしまったらなんていったらいいのか――

ヒソップ　それよりあやめさんと上手くやれよ。

楠木　うん、きっとね。きっと上手くやる。

ヒソップ　じゃあ、もう帰れ。どうせ今ごろパニックになってるんだろうから。

楠木　新しい家が決まったら直ぐに連絡くれよ。

ヒソップ　おう。

楠木　ところで、――大丈夫なのか？　シトラさんは。

楠木、退場。

シトラ、登場している。

出発２　扇風機に感謝

シトラ　大丈夫よあたしなら。
ヒソップ　うん――。
シトラ　――なんだね？
ヒソップ　ママとちゃんと仲良くやるんだよ。
シトラ　関係ないじゃない。
ヒソップ　――そうだね。

間。

シトラ　観葉植物の一つぐらい持っていったら？
ヒソップ　――かさばるから。
シトラ　何も持っていかないの？
ヒソップ　うん。
シトラ　――かえってそのほうがいいかもね。全部そのままにして出て行ったらさ、みんなで団結してあたしたちのこと待っててくれるかもしれないじゃない。
ヒソップ　次の借り手がもう決まっているんだよ。
シトラ　知ってるよ。知ってるけどさ。その新しい借り手の人も一緒になって待っててくれるかもしれないでしょ。
ヒソップ　シトラ、そんなことはないんだ。そんなことは起こりっこない。
シトラ　ヒソップはさ、そんなことが起こりっこない現実がさぞかしお気に召さないのね。そうでも言わないと諦めがつかない？　ヒソップが出ていってさ、あたしがママのとこに行ったら、もう、帰ってこないんだよ二人とも。
ヒソップ　わかってるよ。
シトラ　わかってないよ。もう、帰ってこないんだから、これからはこのお家はもうあたしたちの思い出の中にしかないの。だから、新しい借り手の人がどんな人かとか、実際にいつ取り壊されちゃうだとかそんなことは関係ないじゃない。ねえ、キャッチボールやんない？

間。

シトラ　やらない？
ヒソップ　もう出発だから。
シトラ　出発――。残念な言葉。どうしてそういうこと言うの？

間。

以下、シトロネラは部屋の中を歩き回りながら、

シトラ　扇風機にありがとう。洗面台にありがとう。備付けのベッドも大事に使ったから次の人にもちゃんとかわいがってもらえるといいね。赤い冷蔵庫も、テーブルクロスも。いつかこの食卓に電飾をいっぱいつけて、あたしたちだけの電気食卓にしてさ。で、クリスマスでもないのにチカチカするようないろんな色の電球をいっぱい付けて、なんでもいいからおいしいものを食べたかったの。
ヒソップ　――うん。
シトラ　プリンキャンドルをいっぱい並べてさ。で、二人でワイングラスなんか持っちゃって、そんなに高くはないけれど、掘り出し物のおいしいワインを二人で飲んで「おいしいね」ってあたしがいってさ、あなたは「ワインの味なんてわからないよ」っていって、それでも笑ってくれるの。スリッパもありがとう。ネズミもありがとう。ゴキブリやムカデもあんなにムキになって殺さなくたってよかったのかもしれないね。一緒には生きられなかったんだよね。なんであたしさァ、ゴキブリやムカデを許してあげられなかったんだろう。
ヒソップ　そりゃあれだよ、――気持悪いから。
シトラ　どうしてなんだろう。ねえ、どうしてなんだろうね？
イラン　ごめんね。

イランイラン、登場している。

追憶

追憶1　シトロネラ、水、イランイラン

シトラ　謝らないでいいから答えてよ。
イラン　知らない。ちゃぷん
ヒバリ　ちゃぷん
イラン　とぷーん

◆音響　曲in　水は喜びませんのテーマ

ヒバリ　ヒトは、七〇％以上は、水、なのに、どうして、こんなに、違うのでしょう。
水は喜びません。
水は悲しみません。
水は叫びません。
ローズ　水は、――ゆらゆらしています。
イラン　ちゃぷん。
ヒバリ　とぷん。ちゃぷん。とぷん。
ローズ　ちゃぷん。とぷん。とぷん。

イラン　もうずっとずっと昔、ものすごい音がなり響いて、それが今でも響き続けている。この音はいつから聞えていたんだろう？　――上に水が見えるの。もう水が飲めない。音が遠くなる。あの子は生きていて、みんなも生きていて、みんな遠くなる。どんどんあたしは沈んで行く。
ベルガモ　ええ、ええ、わかりますよ。
イラン　それでも、あたしの中では大きな音が響いてる。
ヒバリ　ゴボゴボゴボゴボ。
ベルガモ　いいですか、こういう話はこれからは、このヒバリとしてください。
イラン　ヒバリとお話するなんて。
ベルガモ　いいですか、これはあなたの唯一のお友達ですよ、大事にしなくっちゃ。

◇音響　曲out　水は喜びませんのテーマ。

追憶2　イランイランとヒバリ

イラン　聞えなかったんですか？　本当に、聞えなかったんですか？　って何度も聞かれたわ。あの子、大きな声であたしのこと呼んでいたのよ。
ヒバリ　ママママママーって？
イラン　そう。それこそ必死になって呼んでたの。聞えなかったはずはない、ってみんな言いたかったのよ。自分の娘の声が聞こえなかったはずがなーい、って。だからね、あたしは耳が悪いのかもしれないなんて思うようになったんだけどさ――って聞いてる？
ヒバリ　聞いてるよ。
イラン　それでもあんたヒナが欲しいの？
ヒバリ　欲しい。
イラン　わかんないヤツねー。親子なんてそんないいもんじゃないってえのに。
ヒバリ　でも欲しいの。
イラン　え、なに、ヒナ産まれたらどうすんの？
ヒバリ　え、ヒナ産まれたら？　なんか可愛がる。ヒナが生まれたら、なんか小麦粉一杯つけて、まぶしてまぶして、で、なんかパン粉つけて、カラっとあげる。
イラン　食べちゃうの？　食べちゃうんだ？　それ全然かわいがってないじゃん。
ヒバリ　食べるかどうかはわかんないけどコロモはつける。ていうか名前は「コロモ」ってする。
イラン　その前に聞きたいんだけどさ、あんた自分の名前とかないでしょ？
ヒバリ　あるよ、「ヒバリ」。
イラン　このパプリカ！
ヒバリ　はぁ？
イラン　ヒバリは種の名前でしょ。それ、「何パンですか？」って聞いているのに「パン！」って答えてるようなものよ。
ヒバリ　パンなんて言ってないじゃん。
イラン　たとえだよ。

ヒバリ　たとえるなっての。話わかりにくくしないで。
イラン　あのね、あんたが、一羽しかいないから今、ヒバリっていや、即、あんたってことになってんだけどね、もし、よ、あんたがヒナ産みたいなら、当然ホレ、オスが必要になってくるじゃない。
ヒバリ　ちょっ、ヤだもう（照れ）
イラン　で、そうなったら、ヒバリ！　っていったら二羽振向いちゃうから、名前が必要なんだよね。
ヒバリ　あたしヒバリじゃないのかー。
イラン　ヒバリでもあるんだけど――。んー、なんかそれじゃ住所聞いたら地球！　って答えるガキみたいなもんじゃない。
ヒバリ　たとえるなよ、
イラン　わかったよ、たとえないよ。んー、そんじゃバニラってのはどう？
ヒバリ　あたし？　なんでバニラ？
イラン　白いから。
ヒバリ　バニラって白いの？
イラン　んーん、緑。
ヒバリ　ぐむ？　じゃなんで白いとバニラなの？
イラン　なんかそういうことになってんのよ。あとね、いいにおいがするって意味。
ヒバリ　ええ？　あたしいいにおいなの？
イラン　結構ね。知らなかった？
ヒバリ　知らなかったよォ――。ええ？　あたし、ええ？　なに、あたしっていい匂いがするんだ？
イラン　するする。自分じゃわかんないのよね。
ヒバリ　なんで？
イラン　え？　だって匂いってのはさ、自分以外の人があんたの匂いをかいで、ああ、あんただって、思うためのものだからさ、自分で自分のにおい嗅がなくてもいいようになってんのよ。
ヒバリ　わかんないからいいや。
イラン　あきらめ早いな。
ヒバリ　で、いつ来るのよオスは？　いつ？
イラン　まだ連れてくるとは言ってないでしょ？
ヒバリ　はあ？　ここまで話させといてオス来なかったら、それはそれで問題になるよ。
イラン　問題ってなによ。あ、ちょっと待って誰か来た。はーい、どなたー？

シトラ、登場。

追憶3　母娘

シトラ　ママ聞こえてる？
イラン　え、うん。聞こえてる。

シトラ　ねえ、ママ。こうやって上を見てるとさ、空が見えるでしょ？　あたし、たまに空が水面に見える時があってね、まだ水の中に入っているんじゃないかって思う時があるのよ。こんなことずっと忘れてたのよ。ずっと忘れてたんだけど思い出しちゃったの結婚して。

イラン　あたしはちゃんと、シトラの声は聞こえてたよ。

シトラ　声？

イラン　忘れてないよだから。

シトラ　ねえ、あたし奇病にかかったの。あたしの身体、ミズウミになっちゃうんだって。

イラン　うっ、そー。

シトラ　海老の尻尾を毎日飲んで、水を一日、二さじまでにすれば大丈夫なんてベルガモット先生は言っていたんだけどね、あんなのはきっと嘘だと思うの。だってあたし、倒れてから一度もおしっこにいかないのよ？　待っててもも全然出ないの。多分あたしの体、ちょっとづつミズウミになっていっているのよ。聞いてる？

イラン　え、うん。聞いてる。大丈夫よ。

シトラ　じゃあ――。

イラン　うん。答える。答えるね。

間。

イラン　身体が動かなかったんだ。

シトラ　あたしが溺れてるのに？

イラン　動かなかったのよ。

シトラ　あたしが死にそうになってるのに？

イラン　動かなかったの。

シトラ　死んでもいいって思った？　どうなってもいいと思ったの？

イラン　ううん。いいわけないよ。いいわけないんだけど、だけど身体が動かなかったの。よく覚えてないの。

シトラ　――

イラン　と、思う。

シトラ　と、思う？

一拍。

シトラ　昔のことをずっと言われるのは嫌なもの？

イラン　どうして？

シトラ　我慢できなさそう。

一拍。

シトラ　あたしは我慢できないし。ママにはもっと我慢できない。

一拍。

シトラ　本当のことといって

イラン　嘘じゃないの。嘘じゃないんだけど、いや、そうね、嘘ね。嘘はやめる。ごめん。本当に、ごめんなさい。

一拍。

イラン　あのね、よく覚えているんだけどね、なんだか、ぼーっとしてて。本当に助けたかったのか、死んでもいいって思ったのか、よくわかんないの。ただ、ぼーっとしてて。あんたを見てて。ずーっとあんたが沈んでいってしまうのを見てて、なんとも言えないの。なんとも言えない気持だったの。一瞬、発作的にあなたを助けなきゃと思って飛び込もうと思ったの、ミズウミに。もう、それこそ考える暇もなく。だけど、ヒバリのお船のあれ、ほら、ペダル？　ペダルがあたし、あのスネに当たっちゃったの。それで痛くて。痛かったのすごく。痛い！　って思ったら一瞬遅れたの。遅れたらなんかあなたがもう見えなかったの。そしたらあたしも怖くて。怖くなっちゃったの。そのあなたがね、見ている景色がわかったの。水面があって、沈んでいってて、遠くになっていく空にあたしが映ってて、あたしはあなたを助けもしないの。水ばっかり身体に入ってきて、それ以外何にも無くなっちゃうの。それがなんか、あたし、怖かったのよ。あたしね、あなたが上を見ているように、あたしを見ているように、空を見たの、こうやって上を見て、そしたら水面が見えたのよ、あたしにも。それであたしにもあたしを助けてくれなかったパパが見えたの。それが怖かった。怖かったのよ本当に。

一拍。

イラン　こんなの嘘ね。パパなんて嘘ね。パパなんて嘘――。何かしらね。

一拍。

イラン　一瞬、遅かったのよ。本当に。もう。そしたら、もう、となりの白鳥に乗った若い逞しい男の子が飛び込んでくれて、潜っていって、あなたを抱きかかえて上がって来てくれて。その子の彼女みたいな子がエンエン泣きながら彼氏を待っているのよ。ギャーギャーすごい声で叫ぶの。やめてやめて、って。そうそう、そうなのよ。あの若い子にとってはあたしの娘なんて、あの、あの若い子にとってはね、やっぱり自分の、その、――どうだっていいんだものね。その子にとっては、よ。そうなの。だから、そうなの。そう。どう思ったのかしらね。あの若い子にあたしどう見えてたのかしらね。――あなたは息をしてなくて、若い男の子が口づけしてあなたの身体の中から水を吸い出してくれたの。そうしたら、あなたはゲロを吐いて、ゴホゴホ言って、すごい声で泣き出して。ものすごい声だったの。産まれた時みたいにあなた泣いたのよ。それでその声を聞いてて、あたしはもうホッと

して。んーん、ホッとしてない。ホッとなんてしてないわね、なんだか、もう、怖くて。――怖かったのよ、あなたが生きていることが。――あなたが生きていて、泣いているのが怖かった。あなたの声が、もう、なんだか聞いちゃいられないほどで、あたしそれで、空を見たら涙が出てきて。もう怖くて怖くて涙が出てしまったのよ。そしたら、

喋り手（ネロリ）　やりましたよお母さん！　もう大丈夫です、助かります！　助かります！

イラン　って言われて。あたし、それで、わかんなくなっちゃったの。

間。

イラン　ごめんね。

シトラ　ねえ、ママ。あたしは涙が出ないから、あたしの分まで泣いておいてね。どっかで一人で。沢山泣いておいてね。

イラン　泣くとなんか、いいことあるの？

シトラ　いいことあることしかしないの？

イラン　いいことってなに？

シトラ　どうしてそういうこと聞くの？

イラン　知らない。

間。

シトラ　なんか、みじめ。これだけは信じて欲しいんだけどね、あのことがあってからも、ママがあたしを愛してくれているってのは、あたし一度も疑ったことないの。だけど、ママとあたしの間にはものすごく沢山の水があって、水だけしかないの。だからママが可哀想。

イラン　――。

シトラ　もう行くね。

イラン　もう？　もう行っちゃうの。シトラ急いでるの？

シトラ　そうだね。ちょっと。

イラン　ローズヒップが帰って来たらおいしいハーブティー煎れてもらおうよ。なんかね、すごく香りのいいのがあるんだって、

シトラ　うん（でももう行くよ）。

間。

イラン　――そう。じゃあ、あの。なんていえばいいのかしら。こういう時は。

シトラ　「お大事にね」とかでいいんじゃない。

イラン　「お大事にね」

シトラ　お互い様。

イラン　あたしは別に。健康だから。

シトラ　うん。今じゃなくていいけど、ママ、いつかはきっと外に出たほうがいいんだよ。
イラン　わかってる。
シトラ　誕生日もちゃんとやらないとダメよ。
イラン　うん。
シトラ　じゃあ、行くね。

シトロネラ、行きかける。

イラン　あ、そうだ、あなたにプレゼント。ほら、これ持っていって。
シトラ　なに、鳥？
イラン　ヒバリ。一緒に連れて行ってよ。
シトラ　いいよいいよ。世話できないし。大事な鳥じゃないの？
イラン　大事よ。だからちゃんと育てて。これあの、ヒバリのバニラちゃん。よろしくね。
ヒバリ　よろしく。
シトラ　――うん。

出発

出発3　新しい家

ヒソップ、登場。

ヒソップ　僕はこの町を出て行くことになったんです。僕はこの町で生まれ、育ち、ロープウェーイに乗り、彼女と出会い、結ばれました。友人と野球をし、地元出身のサイプレス選手の活躍や不振を語り合ったものです。だけど僕はこの町を出て行く。だから野球の道具はこの町に置いていくことにします。近所に住む少年に「少年！　お兄さんが、このバットとグラブとリストバンドを今、君にあげるっていったら、どうする？」と聞いたのですが、

パルマロ　知らない人から物をもらってはいけないよ、と母からきつく言われておりますもので。
ヒソップ　てめ、知ってるじゃん少年！　一緒にパン食ったろう。揚げパンを食ったろうがこないだ！
パルマロ　お気持ちだけ。

ヒソップ　だから、バットはこの家に。グラブとリストバンドとヘルメットといくつかのサイン・ボールもこの家に。サイプレスのシーズン通算五〇号本塁打の時の貴重なサインボール、地元の人間以外は彼のことなんて知らないけれど、彼はどこからどうみても、最高の強打者だった。そして出発です。「出発」という言葉に僕はもう少し気をつけるべきでした。出発するからには到着しなければいけない。到着するところは今とは必ず別のところなんですから、出発するということは、いつでも、

もう帰って来られないどこかへ向けて出発するということになります。さようならさようなら。もう帰っては来られない出発者にはいつでもそう呼びかけてあげてください。さようならさようなら。さようならさようなら！　どうしたの？

シトラ、登場している。

シトラ　バットとグラブとリストバンドは私がもらってもいいの？
ヒソップ　野球なんかできたっけ？
シトラ　セカンド守らせたらヒソップなんかよりよっぽど、六、四、三っつってさ！
ヒソップ　――それじゃ、怪我しないように。
シトラ　ついてく。

◆音響　曲in　ついてくのテーマ。

間。

シトラ　ついてくから。新しい家が決まったら誰より先にあたしに教えてよ。水道の蛇口を捻ったらあたし、そこから出て行くから。

一拍。

ヒソップ　俺が行くところが砂漠だったら？
シトラ　大丈夫、どこに行ったって蛇口だけはあるんだから。それとも、水のないとこに連れて行ってくれる？　え、今、どこへ行くって言ったの？
サンダル　砂漠だよ。
セージ　ニッポン、トウキョウ、お風呂、水。
パルマロ　ぴちょーん。水になる。
シトラ　ついてく。
パルマロ　ぴちょーん。
サンダル　視線の先にはミズウミがあって、アパートの窓がパタパタ音を立てる。
パルマロ　視線の先にはミズウミがあって、
シトラ　ヒソップは新しい家を案内される。

新しい家に着く、ヒソップ。

ヒソップ　部屋がある。
シトラ　最後に過ごしたアパートはなんていう名前？
ヒソップ　その名前を聞いて俺はジュースの名前みたいだって思ったんだよ。そのことは覚えているんだけどアパートの名前は忘れちゃった。

◇音響　曲out　ついてくのテーマ。

サンダルウッド、パルマローザがヒソップに部屋を案内している。

サンダル　あんまりいいところじゃあないんです。狭いですしね。
パルマロ　でも、お一人でしたら十分ですよ！
ヒソップ　結婚して最初に住んだ部屋をそっくり小さくしたみたいだ。バスルームのあった場所に洗面台。
パルマロ　きれいな洗面台でしょう？
ヒソップ　あ、これはトイレですか？　ちょっとお借りしていいですか？
サンダル　どうぞどうぞ。

ヒソップトイレにはいる。

パルマロ　（小声で）本当、余計なこと言わないで。兄ちゃんは黙ってればいいからさ。
サンダル　でも問題になりそうなことは先にいっておかないと。引越ししてもらってから色々問題出てきました、っていうんじゃ悪いじゃない。この部屋はやっぱり日当たりも良くないし、
パルマロ　ホント、ホント、いいから。黙ってって。
サンダル　なんか聞かれても？
パルマロ　答えてもいいけど、余計なことは言わないで。
サンダル　え、それは何？　嘘をつけということ？
パルマロ　そうじゃなくて、

トイレの中から音が聞える。便器の上の水の出て来る所からシトロネラが出て来る。

シトラ　うあうあはうあうあー。はう。はうっ。
パルマロ　――今の何？
サンダル　さあ？

ヒソップ・シトロネラ、トイレから出て来る。二人になっていることに驚くパルマローザ。

ヒソップ　あ、すみません。
パルマロ　ええ？　ええ？　ちょ、今、ええ？
サンダル　増えた。――増えた。
シトラ　本当だ。あたしたちの家にそっくり。
ヒソップ　でしょ？　ダブルベットのあった場所にストレッチャー。
シトラ　ストレッチャーってあれでしょ？　救急車とかに乗る時に使うやつでしょ？
ヒソップ　そうでしたっけ？　細いですね。

サンダル　ええ。すみませんね、この部屋はハイ、こんなものしかなくって、二人で寝るにはちょっと――。
パルマロ　これがまた優れもので。救急車に入る時に、ここの足がこうやってパタンて折れるから、この、乗っている人の高さが、変らないでそのまんま、スウーっと救急車の中に入れるでしょ？
サンダル　救急車なんて縁起が悪いよ。
パルマロ　「縁起が悪い」なんて言葉のほうがよっぽど縁起が悪い！
シトラ　棺おけにもスーッと入れるわけですね。
パルマロ　（ぎょっとして）ええ、そう、そうなんです。
ヒソップ　これ、鳥かごなんかは置いても構わないですかね？
サンダル　どれぐらい鳴くかによりけりですかね。まあ、場合によっては――
パルマロ　★全然かまいません！　なにいってんの、よりけらないでしょ。全然大丈夫です。よりけりませんから。
ヒソップ　よりけりませんか。やっぱり、どうしてもこれはあの、捨てるわけにいかないんでね、
パルマロ　ですよね、こういったものは。
シトラ　これもう一羽飼わない？　オスが欲しいんですってこのヒバリ。
ヒバリ　バニラだっての。名前があんだっての。
ヒソップ　飼わないでもいいよ。
シトラ　そう？
ヒバリ　飼えよ。
ヒソップ　ちょうどいいのがあるから。ほら、これ見ててくださいよみなさん、すごいんですよ。
パルマロ　え、え、何がですか？
ローズ　ヒソップがカプセルを開けますと中から一羽の鳥が。

セージ、登場。

セージ　鳴かぬなら殺してしまえ。鳴かぬなら殺してしまえ。
ヒバリ　何こいつ。

ヒソップ　ホトトギスだ。
シトラ　わぁ。あたし達に育てられるかしら？　あやなし鳥。
ヒソップ　さあ？
シトラ　頼りない人。
ヒソップ　君だって。
シトラ　フフフ。そうね。あたし達って頼りない。頼りないんです。
サンダル　――え、ああ、はい。
パルマロ　すごーい！　ええ？　すごーいですね本当に！　ちょっと兄ちゃん見た？　見た？
サンダル　見た見た。うん。すごいね。あんまりわざとらしく驚くとかえってあれだよ。
パルマロ　はぁ？　だって本当にすごいじゃない。

ヒソップ　いやいや、つまらない手品ですよ。
サンダル　いやいや。つまりましたよ、結構。
パルマロ　それにしてもいいお天気ですね本当に！　今日があんまりにもいいお天気で、今後、どんなお天気の日も今日のこのお天気には勝てるわけないんじゃないかって気がしますよ。こんなに奥さんはかわいらしくて、新しいお部屋はよく掃除されていて、家具の一つ一つがお二人に「お帰りなさい」って声をかけているみたいで、
ヒソップ　あ、そうだそうだ、あのですね、一つ、僕、あの叢雲屋なんですけど、
パルマロ　叢雲屋――
ヒソップ　そういうのは別にいいですか、っていう、――アレなんですけど、一応。

パルマローザは叢雲屋の職務内容を分かった上で、居住させることを躊躇する。

ヒソップ　マズいですか？
サンダル　いえいえ、もちろん構いませんよ。
パルマロ　ああ、はい。もちろん。
ヒソップ　もう少し見てていいですかね？
サンダル　ええ。じゃあ、僕らは下に居ますんで、よかったら声をかけてください。
ヒソップ　どうもありがとう。

サンダルウッド、パルマローザ、退場。
残された二人はやや気まずい空気。

シトラ　人気無いの、叢雲屋さん？
ヒソップ　そんなに無いみたい。まあ、でもそんなの慣れてるから。
サンダル　夜。

間。

ヒソップ　ここでいい？
シトラ　ここがいい。
パルマロ　ありがとうございます。あーさ！
サンダル　夜。
パルマロ　あーさ！
サンダル　夜。
パルマロ　あーさ！
ヒソップ　夜。
シトラ　朝！
ヒソップ　夜。

シトラ　朝。
ヒソップ　夜。
シトラ　あさ――。
ヒソップ　夜――、夜――、夜――、夜、夜、夜――

出発４　バリバリヒバリ

セージ、登場。具合が悪そうである。

ヒバリ　アサー！　アサー！　アサー！
セージ　うるせえよ、おめえ。
ヒバリ　朝！　朝！　朝！　朝！
セージ　わかったよ、なんなんだよ。あのさあのさ、なんかあの、テレビの音が急に、ガンガンガンガン大きくなっていって、うわ、やばいやばいうるせーよ近所迷惑だよリモコンリモコン、と思ったらケツでこの、リモコンを踏んでたみたいな時ってあれ――、焦るよなァ。
ヒバリ　――焦る焦る！　で、リモコンって何？
セージ　チッ――ホント話の通じねえやつだなお前。
ヒバリ　だって知らないんだもん。ねえー、せっかく一緒に住んでいるんだからもうちょっと楽しくやろうよォ。
セージ　フン。おまえ鳥だろ？　仲良くやれねえだろ。
ヒバリ　ナカヌナラだって鳥じゃん。
セージ　俺、本当はナカヌナラじゃねえもん。
ヒバリ　何、本当って？
セージ　え、大臣だからさ、本当は俺。
ヒバリ　――ダイジン？
セージ　――いいよだから、わかんねえよお前に言っても。
ヒバリ　しどい。
セージ　しどいんだよ、俺は。あーもう。おまえ、なんだ、くさい。
ヒバリ　はあ？　あたし良いにおいだよ。
セージ　あのな、それ自分で言うことじゃねえだろ。俺がくさいっつってんだからくさいんだよ。わかったか臭い鳥。

一拍。

セージ　あ、次にお前がなんて言うかわかったわ。
ヒバリ　何？
セージ　しどい。

一拍。

セージ　あれ、黙っちゃった。ねえ、ねえ、臭い鳥。あれ？　――臭い鳥。臭いと／バニラさん。
ヒバリ　なに？
セージ　――あのさ、ここは何？　奥さん病気なの？
ヒバリ　うん。そうなの。シトロネラっていうんだよ。
セージ　ふーん、亭主は何やってんの？
ヒバリ　ヒソップはねえ、叢雲屋さんだね。って言ってたよ。
セージ　あー、へー？　すごいじゃんバニラさん、叢雲屋とか知ってるんだ？
ヒバリ　あったり前じゃん。
セージ　え、じゃあ何やる人？
ヒバリ　は？　知らないの？
セージ　うん。何やる人？
ヒバリ　――教えない。
セージ　あー、バニラさんもわかんないのか。
ヒバリ　わかるよ！　わかるに決まってんじゃん！
セージ　え、じゃあ、教えてよ。俺わかんねえからさ。
ヒバリ　だからァ、あの、なに、えーとね、ク・もがァ、ムラになるじゃない？
セージ　お前知らねえんだろ？
ヒバリ　うるさいな。なに？　人の話最後まで聞かないで。

一拍。

セージ　叢雲屋っつうのはな、明日とか明後日とか、もうすぐにでも死んじゃう人の家に行って「あなたのご家族はもうすぐお亡くなりになりますよ」って教えてあげる仕事なんだわ。「月に叢雲、花に風」っってよ。
ヒバリ　へー。
セージ　――わかってんの？
ヒバリ　うん？
セージ　わかんないの？
ヒバリ　うん。
セージ　――完璧なものにはいつでも邪魔が入るってことだよ。
ヒバリ　へー。（夢見るように）月に叢雲、花に風――。
セージ　バニラさんてさァ、バカでしょ？
ヒバリ　はァ？　何あんた？
セージ　ウソウソ。かわいい。バニラさんはとってもかわいいよ。
ヒバリ　――ムカつく。

セージ　あ、ごめん、バニラさんとか呼ぶの馴れ馴れしかった？　臭い鳥とかのほうが良かったですか？
ヒバリ　バニラでいいし。
セージ　じゃあ、そうするわ。でもすごい似合っているよね、バニラっていう名前が。
ヒバリ　なにそれ、ムカつく（照れ）。ねえ、顔色悪いよ。
セージ　悪くねえよ。
ヒバリ　誰かに言ったほうがいいって。
セージ　悪くねえって。

間。

セージ　――悪いな。
ヒバリ　悪いよ。あんたムカつくけど、身体には気をつけないと。食べ物が悪いのかな？
セージ　んー。やっぱ本当はナカヌナラじゃないから無理が来てんだわ。
ヒバリ　ナカヌナラ、ダイジンに戻りたいの？
セージ　ま、ダイジンじゃなくてもいいんだけど――。チタンカーメンズに戻りたい。
ヒバリ　またわかんない言葉だ。――あれ？　おい、おいナカヌナラ！　ナカヌナラ！
セージ　夜。
ヒバリ　朝。
セージ　夜。
ヒバリ　朝。
セージ　夜。
ヒバリ　朝。
ヒソップ　夜。
シトラ　朝。
ヒソップ　夜。
シトラ　朝。
ヒソップ　夜、夜、夜――

セージ、ヒバリ、シトラ、ヒソップ、退場。

出発5　楠木の出発

あやめ、楠木、登場。

あやめ　死んでる。
楠木　死んでない。
あやめ　死んでる。

楠木　死んでない。
あやめ　絶対に死んでるって。
楠木　そうとは限らないでしょ。
あやめ　限るよ。もう、だって、何ヶ月経ったと思ってんの？　そりゃ、百パーセントとは言わないけど、明らかに殺されてるでしょ。
楠木　そんなことないって。
あやめ　もういいよ、気休めは。ほんと聞き飽きたから。マジでヤなんですけど。

間。

楠木　実はさ、――知ってんだよね、俺。
あやめ　――何を？
楠木　セージ君の居場所。
あやめ　え？
楠木　うん。知ってんだ。
あやめ　――なんで？
楠木　――俺が隠したから。
あやめ　ん、ん、ん？　どういうこと、どういうこと？
楠木　いや、だから、あの、そうそう、俺がセージ君を隠して、今、ヒソップに持っててもらってる。
あやめ　え、なんで？　え、え、え、え、マジで言ってるの？
楠木　ウソで言わないでしょ。全然本当だよ。
あやめ　え、ていうか、ウソ・セージ元気にしてるの？
楠木　さあ。元気かどうかまではわかんないけど、とりあえずまだ生きていると思うよ。
あやめ　絶対？　絶対ね？　うわ、待って待って、なんで、ちょっと、え、どういうこと？　ほんとに楠木さんがやったの？
楠木　そうだよ。
あやめ　犯罪じゃん。――って、あ！　ＤＨ？　だから仕事でってことか！　あぁ、そっか。そっか。素でやるわけないもんね。あ、そっか。びっくりした。なるほどね――。あ、なんか、あ、そっか、良かった。え、そんで生きてるんでしょ？　てか、えー、でも、あたしとかにさあ、ＤＨの仕事のこと言っちゃったらマズいんじゃなかったの？　他言無用だって前言ってなかったっけ？
楠木　言ったね、他言無用。あ、ちなみに、仕事ではないから。
あやめ　え、そうなんだ。
楠木　一応、うん。個人的にやった。

◆音響　曲in　ひとさらいのテーマ。

あやめ　は？　個人的に？

楠木　犯罪だよだから。仕事じゃない。
あやめ　それって、
楠木　★わかってるよ、取り返してくるよ。ちゃんと。

一拍。

あやめ　ごめん、なんか、全くついていけてないんだけど、
楠木　いいよ別に、ついてこないで。
あやめ　え、個人的になんでそういうことをしたの――？
楠木　わかんないけど。えー、だから、――わかんないよ。
あやめ　え、え、言って言って。
楠木　チタンカーメンズが居なくなればだから、――なんかがうまくいくと思ったんじゃないの。

間。

楠木　とにかく、セージ君は俺が連れて帰ってくるからさ。って言っても今はセージ君っていうか、ホトトギスになってるんだけど。
あやめ　ホトトギス？
楠木　ホーホケキョだよ。それはウグイスだよバッキャロー。
あやめ　――はい？
楠木　ごめん、今まで黙ってて。
あやめ　いや、まあ、それはいいんだけど――。
楠木　ちゃんとまあ、セージ君はなんとかしますんで。――ご安心ください。
あやめ　――いや、じゃなくてさ。

楠木、退場。

あやめ　そうじゃなくて。

場面転換。

◇音響　曲out　ひとさらいのテーマ。

6　光線　届かない

発話

発話1　最大値

ヒソップ、登場。手にした「リスト」を読んでいる。
そこへシトロネラ、登場。ヒソップ、慌てて読んでいた紙を隠す。

シトラ　あー、なんで隠すの？
ヒソップ　別に隠してないよ。
シトラ　お仕事の紙？
ヒソップ　ん、あぁ、リストね。そうそう。
シトラ　今日はまだお仕事はいいの？
ヒソップ　うん、まだね。あとでゆっくり。行くわ。
シトラ　ふーん――。のーんびりー。
ヒソップ　そそ。うん――。

ヒソップ、何やらそわそわして落ち着かない様子。

シトラ　ねえ、今日までの中でさ、ヒソップはいつが一番ハッピーだったと思う？
ヒソップ　さあねえ。
シトラ　いつ？
ヒソップ　んー、結婚式かなァ。
シトラ　えー、それじゃ結婚してからはダメだったみたい。
ヒソップ　――地獄だよ。
シトラ　地獄？
ヒソップ　君は奇病にかかるし、君の奇病の苦しみを俺はわかってあげられないし、君の奇病で俺がどんなに苦しんでいるか君はわかってくれなかったし、君は君をわからない俺を許してくれなかったし、俺は俺をわからない君を許してあげなかった。
シトラ　――それが地獄なの？
ヒソップ　地獄は大ゲサだけど、――大変だったよ。
シトラ　大変て言われるほうが、地獄って言われるより嫌な感じ。
ヒソップ　あ、そう。そうかもね。
シトラ　うん。はは、今のなんか楠木さんみたい。『あ、そう。そうかもね』似てない？　似てない？
ヒソップ　似てる似てる。え、じゃあさ、シトラはいつが一番ハッピーだったの？
シトラ　――今！

ヒソップ　あぁ、今――。そういうことを言わせたかったの？　そりゃ、そんな風に言えればそれが一番いいだろうし、そういっていかなきゃいけないんだろうけどさ、でも、――それはつまり、処世術じゃないか。
シトラ　何、処世術って？
ヒソップ　なんだ、だから要領よくやるための術（じゅつ）だよ。
シトラ　じゃ、使って見せてよその術。
ヒソップ　ダメだよ。うまく使えないんだ。うまく使えたら引越しなんてしなくても良かった。
シトラ　引越しはつまんなかったねー。
ヒソップ　つまんなかったな。
シトラ　大家さんはいい人だったけど。
ヒソップ　そうか？
シトラ　妹さんのほうはいい人だったじゃない。（そわそわしているヒソップを見咎めて）何、どうしたの？
ヒソップ　ん？　別に。そうか？　あれ？　結局なんだっけ、シトラはいつが一番なのって、今なの？
シトラ　今の瞬間はそんなじゃないけど、いろいろハッピーなことがあった後だから、思い出して、いける口。
ヒソップ　ハッピーってのは思い出すもんじゃないよ。今、感じるとるものだよ。
シトラ　でも、さっき結婚式がハッピーだったって――。
ヒソップ　ん？　ああ、そうだね。――そっか。そうだね。うん。
シトラ　――あたしにはちゃんとあるよ。今、現在のハッピー。
ヒソップ　奇病で苦しむことが？
シトラ　奇病に苦しみながら結婚式のことを思い出す幸せとか、もろもろ。ねえ、水が欲しい。

一拍。

ヒソップ、足早に歩き出して水を取りに行く。

シトラ　ごめんごめん！　いらない。
ヒソップ　いや、いいよ。あげよう。
シトラ　うそ！　スプーンあっちだよ（ヒソップが歩いた方向と逆を指して）
ヒソップ　いいよ。今日は特別だから。コップで飲ませてあげよう。
シトラ　うそ！　なんで？
ヒソップ　いいよいいよ。毎日、海老の尻尾をちゃんと飲んだご褒美だよ。
シトラ　んー、そう？　って、飲んでないんだけどね、実は。

一拍。

ヒソップ　でも、捨ててなかったじゃない。
シトラ　ヒバリに食わせたからして。あれまずいから全然。
ヒソップ　そうなんだ。飲んでなかったんだ――。飲んでなかった――。
シトラ　あぁ――、あたしわかったんだけどね、あたしは奇病になんかかかってなかったの。
ヒソップ　（は？）
シトラ　水が飲みたくなる奇病にかかったのかと思って、なんか、闘病？　病と闘うって、そういう気持になって、やっつけてやるんだァ、みたいに思ってたんだけどさ、全然、あたし奇病じゃなかった。ってことに気がついて。
ヒソップ　いつ？
シトラ　先日。だから、最近は海老の尻尾も飲まないし。
ヒソップ　何で飲まないんだ！
シトラ　だって奇病じゃないのよ。あたしがそう言ってんだから。
ヒソップ　間違いなく君は奇病だよ。
シトラ　なんでヒソップにそんなことがわかるの？　医者でもないくせに？　あたしよりあたしのことがわかるの、ヒソップは？

一拍。

シトラ　ねえ！

発話2　じゃ、言おう。

ヒソップ　じゃ、言おう。君の病気はもう治らない。治らない、ていうか、君は死ぬ。明日死ぬ。
シトラ　明日死ぬ？
ヒソップ　そう、明日死ぬんだ。君はその病気がもう治らなくって、明日には君の身体はミズウミになる。そうなんだおかしいだろう？　明日には君の身体はミズウミになるんだ。そのミズウミの中で君は溺れるようにして死んでしまうんだ。僕だってまだ見てない。見てないから知らないよ。知らないんだけど、近頃、僕はそういう仕事をしているからわかるんだ。君は泳げないから、バタバタ暴れて苦しんで、辛い辛い辛い苦しい中で死んでしまうんだ。せっかくあんなに我慢してきたのに最後には水をゴボゴボいっぱい飲んで、肺にまでめいっぱい水を溜め込んで辛くなって重くなって水になって、死んじまう。それを君に言うべきかどうか迷っているんだ。
シトラ　言っちゃってるじゃん。
ヒソップ　言っちゃってるけどまだ迷っているんだよ僕は。そんなことを言ったら君はびっくりして恐ろしくて、どこに逃げ出していいかわからなくなってしまうんじゃないかと思うんだ。逃げられないんだ。君がミズウミになってしまうんだからね。俺は逃げられる。逃げられるし、実際に逃げているし、逃げているとか逃げていないとかそんな次元じゃなくて、もう、最初っから全然巻き込まれないんだけどね。だから君が。辛い。言わないほうがいいんだろうか、ねえ？
シトラ　――どうして言わないほうがいいの？

ヒソップ　だって、かわいそうじゃないか。それをいったら君は、もう、助かることはないんだって、いよいよ思い知ることになるんだよ？　かわいそうじゃないか。かわいそうじゃないか。
シトラ　——脳天気脳天気。
ヒソップ　脳天気。脳の、中は、晴れてます。
シトラ　それじゃ明日のお天気は？
ヒソップ　明日のお天気は、晴れのち雨。
シトラ　のち？　何。
ヒソップ　晴れのち雨。
シトラ　のち？
ヒソップ　あ、その先？　その先は知らない。
シトラ　教えて。
ヒソップ　だから知らないんだよ。
シトラ　いいから教えてよ。
ヒソップ　わからないって。——え？　なんでそういうこと聞くの？　わかんないよ。俺、だって、天気のことなんて全然わからないでしょう？　わからないじゃない？　なんで俺に聞くの。
シトラ　あたしはだって明日死ぬんでしょう？
ヒソップ　そんなことないよ。君は死なない。
シトラ　だって、奇病で。
ヒソップ　治る。きっと治る。
シトラ　治らないってさっき——、
ヒソップ　治って欲しいんだよ。
シトラ　（うんうん）
ヒソップ　——言っちゃダメなんだ。そんなことは絶対。もう、生きていく望みが無い、なんてことは、絶対いっちゃダメなんだそんなこと。だって、そしたら生きていく望みがないじゃないか。生きていくってことは、今、生きているってこととは全然違うんだ。今じゃないいつかに、ここじゃないどこかで、生きていくっていう意味じゃないか。こんな場所。こんなトコ。うんざりだ。いつだってうんざりなんだよ。
シトラ　（うんうん）

一拍。

シトラ　ねえ、
ヒソップ　——天気？
シトラ　そう、お天気は？　晴れのち雨。——のち？
ヒソップ　のち晴れ。——のち雨。のち晴れ。のち、くもりのち雨、のち晴れ、のち晴れのち晴れのち晴れのち晴れのち晴れのち晴れのち晴れのち晴れ——
シトラ　フフ。たまには雨もいれてあげないと。

ヒソップ　ダメだ。雨なんて大っ嫌いだ。ミズウミになる。だから、雨なんてもういらない。もう二度と雨なんて降らないんだ！
シトラ　だけど明日は晴れのち雨でしょ？
ヒソップ　晴れだよ！　明日は晴れだ。明日も明後日も晴れなんだ。シトラ！

ヒソップ、泣く。

シトラ　そんなバカみたいなことで泣かないで。
ヒソップ　泣いているフリだよ。
シトラ　そんなバカみたいなことで泣かないで。
ヒソップ　泣いているフリだよ。バカみたい？　バカみたいって言ったか今？　君に何がわかるんだ？　俺は、俺は、俺は、俺は――、

ヒソップ、バタりと倒れる。

シトラ　また寝ちゃった。

発話3　サイン

このあたりから段々とヒソップとシトラが離れていく。

ローズ　彼はいつも不機嫌になると突然火が消えたように寝入ってしまうんです。彼女は彼を起こすこともできましたが、あんまりヒソップが心地よく眠っているように見えたので、そのまま寝かせておきました。
シトラ　ヒソップ！　ちょっと起きてよ！　ヒソップ！　何？
ローズ　そのまま寝かせて（おきました）。
シトラ　起きてよ！
ヒソップ　ごめんごめん。大丈夫、もう起きたよ。
シトラ　音が遠くなってるの。あたしまたゆっくりミズウミの中に入っていっているみたい。あれ？
ヒソップは？　ヒソップはいるの？
ヒソップ　いるよ。いる。
シトラ　ヒソップはいない。ヒソップはいない。
ヒソップ　うん。うん？
シトラ　撫でて。
ヒソップ　撫でるよ。撫でる。
シトラ　本当に撫でてるの？　もう感覚がない。

間。

シトラ　あたしバタバタ暴れたりなんかしないで、ちゃんと沈んでく。今度こそちゃんと沈んでいくよ。すごく浅いとこなのよ。あたしは浅い浅い水の底にいて、だんだんだんだん、沈んでくの。あたし沈みながら手を伸ばすんじゃない？　どうせなら左手がいいな。右手は近くにあった方が便利だし。どんどん上に伸びていったら、いつかはぶはっ、つって外に出る。そしたら水面に突き出た拳をね、グーになってるのをパーにしてやるのよ。手の平は睡蓮の葉になって、水面と平行になって張り付くわ。指紋が葉脈になって張り付いて、日の光を一杯に浴びると、生命線はツーって手の平から剥がれて、茎になって伸びてって、そこに花が咲くの。――何の花がって？　睡蓮が。何の花がって？　睡蓮が咲くのよ！　それでヒソップがその花を毟り取って部屋の花瓶に飾るの。

ヒソップ　――でも、わかるかな。沢山あるからね、睡蓮は。

シトラ　多分、わからないわ。だってあたしたちすごく遠くにいるんだから。

ヒソップ　じゃサインを決めておこう。

シトラ　サイン？

ヒソップ　そしたらうまく行くんじゃないか。こうやって手を叩いたら、それがサインだよ。それまでは毟り取られそうになっても、がんばって、しがみついているんだよ。

シトラ　（観客に）そうして翌日に彼女は死にました。

◆音響　曲in　そうして翌日に、のテーマ。

間。

ヒソップ　そうして翌日に彼女は死にました。ヒソップは棺おけにいっぱいの花をいったんは入れましたが、それを全部取り除いて、棺には彼女だけを残しました。

シトラ　ベランダにストレッチャーを出して、その上に棺を。

ヒソップ　棺おけが左右にゆすぶられるとゴトゴト音がします。

シトラ　スペースが余ってしまって少し寂しそうだったけど。

ヒソップ　彼女はもう死んでいるので寂しくはないはずだ。

シトラ　ヒソップはそう思ったらホッとして、すっきりしてきました。

ヒソップ　彼女はもう死んでいるので寂しくはないはずだ。

シトラ　口に出してそう呟いて、それは間違いのない事実です。

ヒソップ　彼女はヒソップとは今や全く違う状態になりました。

シトラ　苦しむ彼女がいなくなったので、

ヒソップ　苦しみは彼がすべて相続したのです。

二人　相続。

シトラ　彼がこんなにも苦しんでいるんだから彼女はもう苦しまないでいい。

ヒソップ　その証拠に彼がこんなにも苦しんでいる。

シトラ　彼は苦しみでニコニコ笑いがこみ上げてくるのを留めることができなくなりました。

ヒソップ　嬉しい。彼女はもう苦しまないんだ。

シトラ　めでたしめでたし。

二人　嬉しい。彼女はもう苦しまないんだ。
二人　ニヤニヤしちゃうからやめて下さいよ。
ヒソップ　彼女がそういった時のことを思い出した。
シトラ　ニヤニヤしちゃうからやめて下さい！
ヒソップ　初めて彼女を抱きしめた日のことだ。

ヒソップ、鳥籠を持って移動する。

ヒソップ　ヒソップはヒバリの籠を持って窓際に。
シトラ　籠の鳥を空に。
ヒソップ　籠を開けて初めて気づいたことですが、ホトトギスが死んでいます。もう一羽も、飛び立とうとせず、籠の中に。ほら、お前は行くんだよ。
ヒバリ　だけど卵が――
ヒソップ　ホトトギスとヒバリじゃヒナは孵らないよ。
ヒバリ　うん。でも――。
ヒソップ　これから君は一人になるんだからしっかりしなけりゃいけないよ。君にヒマワリの種をあげる人はいなくなるし、水を換える人もいなくなるんだ。
ヒバリ　――。
ヒソップ　今までも君は一人だったんだから大丈夫か。大丈夫だね。君は最後の最後まで一人なんだからしっかりしなけりゃいけないよ。
ヒバリ　バニラだよ。
ヒソップ　じゃあ、もうお行き。卵は僕が見ててやるよ。
ヒバリ　うん、あのォ――今までそのォ――
ヒソップ　こういう時はね、「すみません」というんだ。ニッポンというところではね、謝罪の言葉と感謝の言葉が同じなんだよ。謝罪することは感謝することで感謝することは謝罪することなんだ。
ヒバリ　わかった、ありがとう！
ヒソップ　（黙ってうなづいている）
パルマロ　それから何日か。ヒソップはベランダに置いたイスに座ったきりちっとも動きませんでした。ヒバリは彼の上をぐるぐる周り、飛びながら鳴きました。
ヒバリ　「一升貸して二斗取る、利取る利取る」「一升貸して二斗取る、利取る利取る」
パルマロ　何日目かの夕暮れにヒバリは部屋に戻り、じっと窓の外を見つめているヒソップを小さな嘴（くちばし）でつつきました。ヒソップはロッキングチェアーに座ってぎしぎしそれを揺らしています。できればもう少しだけ卵を温めて、孵るはずのないヒナのことをぼんやり考えてみたかったのですが、真っ直ぐにミズウミを見つめているヒソップを真っ直ぐに見つめすぎたヒバリはやがて、
ヒバリ　見ちゃいらんないよ、ヒソップ、見ちゃいらんない。
パルマロ　と、言って窓の外へ。

脈拍

脈拍1　猫パンチ

サンダル　ヒバリは小さい身体に不釣合いな声でこう言ったんです。
ヒバリ　白猫君は僕を食べたいとは思わないか？　どうせなら君みたいにまっ白でふくよかで上等な猫に僕を食べて欲しいんだ。
パルマロ　全く興味を示さない白猫。
サンダル　けれどヒバリはお構いなしで、彼の目の前にゆっくりと身を、横、た、え、ます、と白猫、ふさふさの毛玉の前足で、ばしっ
セージローズ　猫・パンチ！　猫・パンチ！
ベルガモ　ズさあっ　ズさあっ

間。

サンダル　血を流しながらもヒバリは観念して動かない。まだ生きていてもう動かないヒバリ。

と、女が叫ぶ。

サンダル　女の悲鳴がして、白猫がそちらを振向きます。
ローズ　ミズウミの近くに建つアパートの六階、ベランダに一人の男が立っています。
パルマロ　後ろ手にベランダの柵を掴んで前傾姿勢。ラージヒル、ジャンプのポーズ。

何人かで実際にそのポーズ。

サンダル　ヒバリはやがて薄目を開けて、血だらけの身を起こし、その場を離れんがために羽ばたきをせんとする、まさにその瞬間、
セージローズ　猫・パンチ！
ベルガモ　ズサあっ。
パルマロ　動くものが何より好きな白猫。
サンダル　まだ生きていて、もう動けないヒバリ。
ローズパルマロ　ひゅーん
パルマロ　男が落下して水面を突き破る、その音、
セージベルガモ　ざっぶーん、
サンダル　が聞えるその直前、男の動きはスローモーションになって音が消える。
パルマロ　彼の時間は宙吊りにされました。
ローズセージ　シャッターチャンス！
イラパル　パチリ！

サンダル　あとほんの一瞬でこの男の頭は水面を突き破る、そして次の瞬間に彼の身体は水になる。
視線の先にはミズウミがあって、アパートの窓がパタパタ音を立てる。
パルマロ　視線の先にはミズウミがあって、
サンダル　もう動かないヒバリ。

間。
楠木、登場。

楠木　違う、この鳥じゃない。ねえ、どっかに元大臣の鳥を見なかった？
ヒバリ　ダイジン？　ナカヌナラのことじゃない？
楠木　ナカヌナラ？　わからないけど。知っているの？
ヒバリ　ナカヌナラは死んだよ。
楠木　そう――。そうなんだ――。
ヒバリ　だけど卵が残ってるの。
楠木　卵？
ヒバリ　うんとね、なんかぁ、だんだんだんナカヌナラは顔色が悪くなっちゃったからぁ、ナカヌナラとあたしはいいことをして卵を産むことにしたんです。でも、うまくいかなかったから卵は孵らないかもしれないんだけど、それでも卵が残っているの。
楠木　わかったよ。ありがとう。すまないね、こんな時に。

楠木、移動する。

◇音響　曲out　そうして翌日に、のテーマ。

楠木　（観客に）僕はヒソップの最後に住んだ部屋に行きました。そしてそこで、ヒバリの言ったとおり卵とホトトギスの亡骸を見つけました。そこではっきりわかったことですが、僕はもうＤＨには戻れません。それどころかすぐにも僕は逮捕され、自由の身になることはもう一生ないでしょう。――当然のことです。だからあやめさん。卵はあやめさんに任せます。きっと無精卵だからどんなに温めてもヒナが孵ることはないだろうけれど、この卵の中には、ヒバリとホトトギスの、そうしてヒソップとシトラの、あるいは僕とあやめさんの、最後の暮らしが入っているのかもしれません。僕の写真とこの卵を、良かったらシトラのお母さんにでも届けてあげてください。ところで――卵、触れますか？　あやめさん。

舞台上、別の場所にローズヒップが登場している。

ローズ　猫が大勢鳴くと、ヒソップの佇むベランダがねじれ、ジュースの名前のアパートはミズウミに注ぎ込まれるように傾きました。砂をこぼすように。水をこぼすように。ストレッチャーに乗せられたシトラの死体は、すーっと、水平を保ったままミズウミの中へ。
猫　にゃーんにゃーん。

照明　初めての暗転。

脈拍2　空耳

イランイランの家の屋上。
イランイランが写真を持って佇んでいる。
そこへ、ローズヒップ、登場。声だけが聞こえる。

ローズ　ただいまー？　たーだーいまー？
イラン　こっちこっち。
ローズ　屋上？
イラン　うん。

ローズヒップ、登場。

ローズ　へー。珍しいじゃん。外出るなんて。
イラン　そう？
ローズ　うん。え、なに、あたしが居ない時には屋上良く来るの？
イラン　んーん、久しぶり。ていうか、こんなの、久しぶりすぎてわかんないぐらい久しぶり。
ローズ　だよね？　確か。
イラン　――風が吹いている。
ローズ　気持いいでしょ？
イラン　うん。何、今日は泊めてやんないって？
ローズ　ん？　まあ今日はそういうんじゃなかったから。なに、結局もらったの（卵を指して）？
イラン　コロモちゃん。
ローズ　コロモちゃん？　どういうこと？
イラン　ねえローズヒップ聞いて今ね、あなたが帰ってくるまでの間、あたしすっごいすてきな夢を見たの。
ローズ　ああ、そう。よく眠れた？
イラン　ううん。眠ってなんかいないのよ。起きてたの。起きてたって夢は見るでしょ。I have a dreamの方の夢よ。
ローズ　I have a dreamの方の夢か。
イラン　これ、写真もらったの。シトラが最後に過ごした部屋の写真。
ローズ　ふーん。なんだか薄暗くて――、狭いとこね。
イラン　狭いとこね。だけど、なんか、――わかる。こういうとこに住みたがるあの子の、なんか、うん、わかる気がする。
ローズ　――（そういうものかしら？）

イラン　きっと好きなのよ。こういうところ。シトラはね、きっと棺の中に入ってからもしばらくは寝たフリなんかしててね、毎日ヒソップさんの帰りを待ってたのよ。――きっとすごくね、楽しかったんじゃないかしら？　あたし、わかる。わかるの。あのね、こうやってさ、リビングがあって、それでね、シトラは部屋に横たわってるの。

◆音響　曲in　シトラは部屋に横たわる。

以下、舞台上にだんだんと俳優たちが登場してくる。

ローズ　せまいストレッチャー・ベットの上で、
イラン　大き目の棺の中で、
ローズ　かたわらに大きな白い花があって。
イラン　その横には黒い花があって。
ローズ　青い花。
イラン　黄色い花。
ローズ　黒い花。
イラン　白い花。
ヒソップ　バタン。

ヒソップ、登場している。俳優たちがゾロゾロ出てくる。

ヒソップ　シトラは部屋に横たわる。
あやめ　せまいストレッチャーベッドの上で。
ベルガモ　大き目の棺の中で。
ネロリ　かたわらに大きな白い花。
楠木　その横に黒い花。
セージ　青い花。
ヒバリ　黄色い花。
ベルガモ　黒い花。
シトラ　白い花。
ヒソップ　シトラが帰って来た。
ヒバリ　シトラが帰って来た？
楠木　そんなはず無いじゃん。
セージ　今、棺の中に寝かしつけたところだよ。
イラン　シトラは部屋に横たわる。
ローズ　かたわらに大きな白い花
ヒソップ　シトラはその中心に寝そべった白い花
シトラあやめ　その横に黒い花。
イランローズ　青い花。

シトラあやめ　黄色い花
イランローズ　黒い花。
シトラあやめ　白い花。
イランローズ　黒い花。
シトラあやめ　白い花。
ヒソップ　バタン。
イラン　ヒソップがシトラの棺を開ける。
セージ　シトラはもうそこに寝そべっていない。
楠木　ヒソップがシトラの棺を開ける。
ネロリ　シトラはもうそこに寝そべっていない。
ローズ　花の中には、彼女の身体の形がすっぽり残されている。
シトラ　まだあたたかい。
あやめ　まだあたたかい。
ヒバリ　まだあたたかい。
ベルガモ　探せ！　ホシはまだ近くにいるぞ！
楠木　ホシはまだ近くだ。
チタン　探せ！　ホシはまだ近くにいるぞ！
ヒソップ　バタン
イラン　足早に階段を駆け上がる嬉しそうな音。
ローズあやめ　足早に階段を駆け上がる嬉しそうな音。
イラン　わくわくするその瞬間、
ローズ　帰ってきた。
イラン　帰ってきた。
シトラあやめ　帰ってきた。
ヒバリ　帰ってきた。
ヒソップ　帰ってきた。——もうすぐだ。シトラが帰ってきます。もうすぐ。
ヒバリ　シトラが帰ってくる。
ヒソップ　シトラが帰ってくる。
シトラ　もうすぐもうすぐ。
イラン　早く早く！

多人数の喋りの混沌。
やがてパルマローザの語りが残る。小さな声で。

◇音響　曲out　シトラは部屋に横たわる。以下の台詞中？　移動中？　に消える。

パルマロ　——でね。ヒソップがアパートからミズウミに零れ落ちた時には、本当に不思議なことが起こったの。本当なら、ざっぶーんて、音がするところなんだけど、嘘みたいに音がしなくって、波も立たたなかったのよ。落っこちる時に、ヒソップの頭の下には、睡蓮の葉っぱがあって、その葉っ

ぱが、ほら、こいよーって感じでヒソップを待ってたの。で、ざっぶーんて音がするはずの瞬間に、目にも見えない耳にも聞えないぐらい一瞬の内に、二人はあらかじめ決めておいたサインでやりとりをしてね、お互いがそこにいるってことが一瞬でわかったの。――誤解だったのかもしれないけれど、多分、それは間違いじゃなくて。――睡蓮の葉になったシトラの手の平はヒソップの頭を撫でてあげて吸い込んであげて、ヒソップは水面が作る、一直線の中に、ぺったんこになって吸い込まれていったのでした。外には聞こえなかったんだけど、二人の間には大きな音がして、ぐねぐねの水面の中では大きな大きな音が響いていて、いつまでもいつまでもその音は鳴り響いていたのでした。とさ！

パルマローザ、一旦帰りかけ、小走りで戻ってきて。一瞬の間。

パルマロ　　とさ！

パルマローザ頭を下げる。

◆音響　曲in　カーテンコール。

◆音響　曲in　カーテンコールダブル。

◆音響　曲in　客出し音楽。

終劇